語り部

十七歳の特攻隊員

上山孝

目次

一、支那事変勃発　（一九三七年　九歳　小学四年）
二、旧制中学入学　（一九四〇年　一二歳）
三、予科練入隊　（一九四四年　一六歳）
四、予科練の一年　（一九四四年～一九四五年）
五、特攻志願　（一九四五年　五月　十七歳）
六、帰　省　（一九四五年　五月）
七、潜水学校・特攻訓練　（一九四五年　六月）
八、八月十五日　（一九四五年）
九、帰　郷　（一九四五年　八月）
十、私の運命（さだめ）
十一、そしていま　（二千十六年　八十七歳）

巻末附録
附一　福田元少佐とのかたらい
附二　戦争体験記を読んで（福田元少佐の書簡）
附三　兵員総数および戦死者数

一、支那事変勃発　（一九三七年　九歳　小学四年）

赤紙（召集令状）を受け取ったおじさん達の出征式が、小学校の忠魂碑前で、村長さんを始め、村の役員、近所の人達の集う中、盛大に執り行われた。僕たちは、出征される人達が乗合自動車に乗り込まれる迄、日の丸の小旗を振り、軍歌

一、勝って来るぞと勇ましく　誓って国を出たからにゃ
　手柄たてず死なれよか　　進軍ラッパ聞く度に　　瞼に浮ぶ旗の波

二、土も草木も火と燃える　　果てなき曠野踏み分けて
　進む日の丸鉄兜　　馬の立髪撫でながら　　明日の命を誰か知る

を大きな声で歌いながら見送った。

飛行機を作る為の国防献金が全国的に行われる様になり、次第、次第に召集される人の数も増えていった。農繁期には、近所の人達が召集されて人手が足らなくなった家族の元へ勤労奉仕（ボランティア）で田植え、稲刈りの手伝いに行き助けあった。　小学校の児童達は、出征した兵隊さんへ図画や慰問文を書き送り、村の大人たちは慰問袋を戦地の兵隊さんに送った。そして戦死者に対して通夜は家で、葬儀は村葬での弔いが執り行われる様になった。　また、毎月一日、全校児童が、村の鎮守である伊和神社へ武運長久、戦勝祈願の参拝に出かけた。

その当時の小学校は尋常高等小学校と言って、今と違い義務教育はそこでの六年間で終了、その後、旧制中学校、女学校に進学する児童は一クラス（約七十人）の内、五人程度で、大部分の女の子は女工さんや都市部の女中さん（お手伝いさん）、男の子は店の小僧さん（店員さん）として家の家計を支える為に働きに出かけた。就職しないものは高等科へと進み、そこで二年間勉強した。　そして、男子が姉妹以外の女性と会話が出来ない様な時代でもあった。

一九三三年になると、志願すれば海軍特年兵（海軍練習兵）は一二歳から、陸軍特別年少兵（特例年齢兵）は一四歳からそれぞれ一年間の軍事基礎教育を受けたのち一般徴集兵と共に国内外の基地、戦地に赴き自分の任務遂行のため全身全霊を傾けた。若くして国を護る一念で志願兵として戦地へと旅立った海軍特年兵のべ一七、二〇〇名の内五、〇〇〇余名は帰らぬ人となった。新聞、ラジオでは、日支の戦いでの勝利と共に戦意向上、銃後の護りの重要性が叫ばれていた。

そんな中、石油のほとんどを輸入に頼る日本にとって、アメリカ（総輸入量の約七五％を占める）との輸入交渉は困難を極め、石油確保の活路を南方に見出さざるを得なくなった。　南方進出をはかる日本に対し、アメリカ、イギリス、支那、オランダが所謂ＡＢＣＤ包囲網を結成し、それを阻止しようとしたのに対し、

日本、ドイツ、イタリアは日獨伊三国同盟を結び対抗した。戦争が長引くにつれ、生活物資もだんだんと乏しくなって行き、『ガソリンの一滴は血の一滴』と喩えられるようになったが、『欲しがりません勝つまでは』『一億一心火の玉だ』との標語が作られるほど戦争継続の世論が形成され、戦争に反対する者は、非国民呼ばわりされたり、赤（共産党員）と疑われ、特高警察や憲兵に連行され取り調べを受けるそんな戦時色の濃い時世となって行った。

一九四〇年一二月八日の真珠湾攻撃で大東亜戦争の幕が切って落とされた。航空隊の赫々たる戦果が軍艦マーチの前奏と共にラジオから流れ、国民は提灯行列を以ってその戦果を祝った。そして、零戦とそのパイロットは皆の尊敬と憧憬の象徴的存在となり、その当然の結果として海軍甲種飛行予科練習生は注目の的となった。

二、旧制中学入学　（一九四〇年　一二歳）

一九四〇年兵庫縣立旧制赤穂中学校に入学、初代校長は陸軍少将武川寿輔先生、赤穂義士精神と山鹿素行の質実剛健、実践躬行を教育綱領としその実践に努められ、その甲斐あって、全国中学剣道大会で優勝する強豪校として全国に名を馳せる存在となった。入学後、義芳塾（寄宿舎）に入った。先輩の指導のもと、食事、風呂の準備等を当番制で行った。

赤穂中学から毎年数名、海軍兵学校、陸軍士官学校への進学者を出した。体力、学力試験を受け合格の後、中学四年の年齢であれば、その後四年間の将校（幹部）教育を受け卒業し、将校として軍務に就いた。1937 年に予科練（海軍甲種飛行予科練習生）の制度が発足、中学四年一学期終了程度の学力で受験資格が得られると発表されると、赤穂中学からも予科練への志願者が多数に上ったが、学校から願書を受け取るには親の印鑑を押した承諾書を提出せねばならず、親に押印してもらうのが大問題だった。

『予科練で飛行技術習得し、零戦のパイロットとなり戦地の第一線で御国の為に戦うのが男子の本懐』と友と語らいつつ毎日の中学生活を過ごし義芳塾から帰省、親に何の相談もせず、親の目を盗んで承諾書に勝手に押印して提出、学校から送付した。一九四四年一月六、七日の二日間にわたって姫路市民会館において一次試験を受けた。齢一六の時だった。

一六歳の年齢の一次身体検査の合格基準は

一、身長　一四九糎以上
二、体重　四〇ｋｇ以上
三、胸囲　七十三糎以上
四、肺活量　二,六〇〇ｃｃ以上
五、握力　二二瓩以上
六、視力　片眼０．八　両眼一．二以上

七、懸垂　左右片手三秒以上

次に学科試験

一、数学（代数平面幾何）

二、国語（国漢）

三、物象（物理、無機化学）

四、地歴（日本及び外国地理、日本歴史）

そして、口頭試問が行われた。

一次試験に合格し、二次試験をその年の一月下旬に松山航空隊で受ける事となった。体験入隊を兼ねた航空隊搭乗員としての厳格な適性検査が二泊三日で行われ、初日で不合格と判定されれば2日目の検査を受けることなく帰された。そして、合格者には三月末までに入隊先とその日時について各自宛に通知される旨と知らされた。

両親は初めて生まれた男の子を幼少時に事故で亡くし、その後跡取りの長男がなかなか生まれず、やっと生れた男子である私。その子が無事成長し中学校に進学、親元を離れ赤穂での寄宿舎生活を過ごし、勉学にいそしんでいるものと思っていたのが、親に内緒で予科練の試験を受験、二次試験合格との通知が届き、予科練志願が初めて両親の知るところとなった。

一六歳になった息子が予科練入隊、そして無事生きて帰れる保証のない戦地に赴く事に…。戦時色ますます濃くなる中、とても反対の意を唱えられる状況ではなかった。両親の心労いかばかりであったか、筆舌し難いものであったろう。臨終に至っても猶、その時の心境が両親より語られることは無かった。

予科練への出立当日、家の軒先には予め隣保の人達の手で入営門が作られ、そこには交差した日の丸の旗が飾られ、『祝入営　上山孝君』『祈武運長久　上山孝君』と書かれた二本の幟も立てられていた。赤穂中学の学生服に巻脚絆(ゲートル)をし、右肩から左脇にかけて日の丸の旗を襷掛けし出征の挨拶をした。襷掛けしたその日の丸の旗には、前日に行われた出立式に出席いただいた方々の『見敵必殺』等の寄せ書きがあった。その中にあって人絹の真っ白な生地にひときわ墨痕鮮やか、見事な筆捌きで書かれた父の手からなる和歌

一億の意気で木の葉と散る敵機

冴え返る空の雄姿や我子な里

は、出征する我が子を送り出す父の覚悟と思い、米寿を迎えた今となっても思わず涙を流さずにはいられない。

三、予科練入隊　（一九四四年　一六歳）

一九四四年三月二八日、西宮市門戸小学校に集合、受付で各分隊に振り分けられ下士官引率のもと、従兄弟の上山盛一兄に付き添われ関西学院大学中等部校舎と大学の一部運動場を借り上げて設けられた西宮航空隊（三重航空隊西宮分遣隊）へと向かった。航空隊に着くと再度確認の為の身体検査が行われ、不合格者は即帰郷、合格者は軍服をはじめ、褌等の身の回り品が支給されて第十四期前期生一、二〇〇名が入隊した。

支給に当たり寸法合せが行われた。憧れの七つ釦の軍服、軍靴、帽子、下着等が大中小にサイズ分けして置かれていた。被服を身につけ寸法合わせしている同期生の中から、「体に合いません」と声が上がったが、その瞬間「天皇陛下より賜った被服にケチをつけるとは何事か！」と教員から怒声が発せられた。その声を聞いたとたん頭の中は真っ白になり右往左往するばかり。その様子を見ていた教官から次の怒号「服に体を合わせろ！」が飛んで来た。すぐさま同期生同士で服を交換調整し一件落着と相成った。

その後、十三期の指導練習生から懇切丁寧な説明を受け、一種軍装、二種真っ白な夏服、三種訓練衣、襦袢、靴下、褌に至るまで支給された被服の員数を確認し、軍服、帽子には入隊時に手渡された兵籍番号『呉志飛二一二五九号　上山孝』、その他の支給品には二十四分隊五班と記入した。そして、員数さえ合えば何を

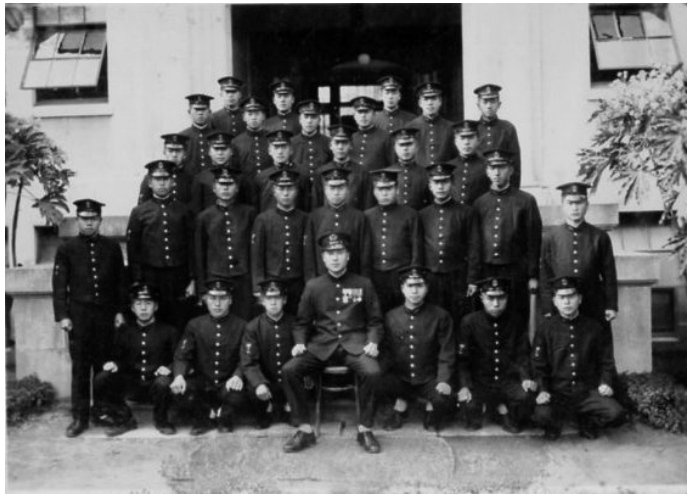
出征時寄せ書き

しても構わないと受け取れる言葉ではあったが「一物たりとも紛失するな！」「失くした物は何としても必ず発見せよ！」「若し紛失、損傷した場合は厳罰が下されるものと覚悟せよ！」と厳しく指導された。また「いつなんどき被服点検があっても構わぬよう真っ白に洗濯しておくように！」「常に靴下、褌、夏冬の襦袢の一枚は死装束としてふさわしいものを保管せよ」と軍人としての心得も教えられた。

被服の支給が終わると、家から着てきた衣服と身の周り品、私物一切を見送りに来た家族、同伴者に渡し娑婆っ気のない身となった。その後入隊式が始まる迄の間、隊内見学を行い、日課、軍人心得、号令ラッパ等隊内での事柄に対する様々な説明を受けた。軍隊での言葉づかいに始まり、礼儀作法、日々の生活に至るまで不慣れな上に判らない事ばかり。目上に対しては『貴方』自分を『私』と呼ぶことから始まり、同期の仲間内では『貴様』『俺』、上官に対しては役職名又は『〇〇中尉、〇〇隊長』と呼ぶ。陸軍の様に『〇〇中尉殿』と階級の下に殿をつけて呼ぶことを一切しない。上陸中にする敬礼をしても隊内では訓練中や特別な場合以外は必要ないとの海軍礼法等々を教えられる通り行ってみるのだがなかなかうまくいかない。間違っていれば教員は返事さえしてくれない。一ヶ月が過ぎる頃、やっと板についてきた。

入隊式までの四日間、追い回される様に時間が経って行くのだが、入隊式後は入隊者を一切お客さん扱いしないと決めた教員の口から発せられる号令その他が誠に容赦なく強烈で、叱り飛ばされているように聞こえてくる。こんなに厳しい所とは夢にも思っていなかった同期生の中には夜の吊床で涙する者もいた。今更家に帰ることは不可能であり、褌を締めて歯を食いしばる以外方法無しと覚悟した。

予科練集合写真

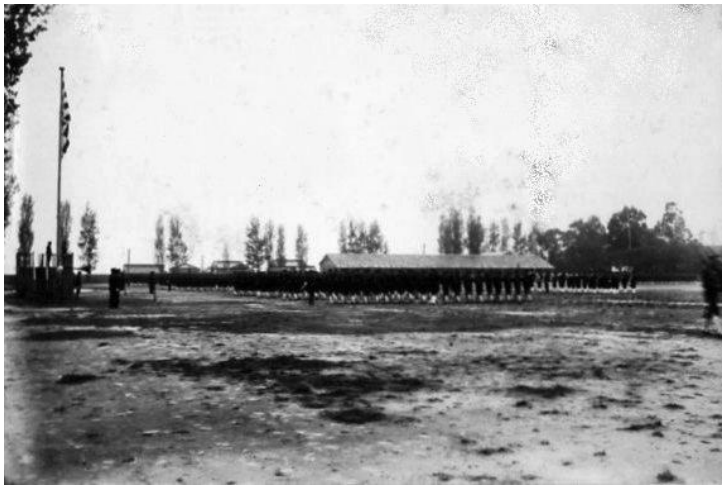


予科練集合写真

四、予科練の一年　（一九四四年～一九四五年）

四月一日　一、二〇〇名は七ツ釦の第一種軍装で練兵場に総員整列。三重海軍航空隊司令藤村中佐より『海軍二等飛行兵ヲ命ズ』との辞令を受け、その後訓示、副司令、各分隊長の紹介が有った。式が進むにつれ「いよいよ帝国海軍の一員に加えられた。『サアヤルゾ』」と闘志が湧き出し、武者ぶるいする思いであった。そして、無事入隊式が終わり『解散』の号令が発せられると、駆け足で皆各分隊の兵舎に帰った。兵舎において分隊長中尉、分隊士少尉、兵曹長（准士官で一兵卒からの叩き上げ）、先任教員外一〇名の紹介があった。練習生一五〇名で一班一八名、二八分隊八班編成だった。

予科練閲兵式



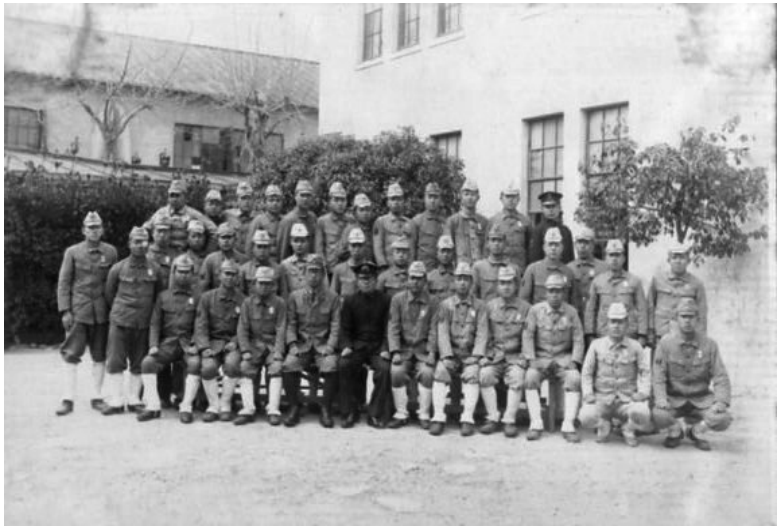
予科練閲兵式　分列行進

練習生を直接指導、教育する教員班長は、各海戦に従軍し、乗艦が敵の攻撃を受け大破、炎上、沈没する中、生き残ったという歴戦の猛者ばかり。これからこの教員班長から軍人教育を受けるのかと思うと空恐ろしくなってきた。そして（後で知ることになるのだが、罰直の際、思い切り尻を狙い撃ちするのに使用される）墨痕鮮やかな文字で『海軍精神注入棒』と書き込まれ、その上ご丁寧にも房まで付けてある野球バットを太くしたような棒を手に持ち、「今日から貴様らは帝国海軍軍人となった。なった以上一切容赦はしない。徹底的に海軍精神を叩き込んでやるから覚悟せよ！カカレ！」と発破がかけられた。他の教員は長さ七〇糎程の樫の木で作られた指揮棒を持ち眼光鋭く立ち並んでいた。練習生一同怯夫が恐怖に襲われた如く深刻な様相であった。

一学期中の厳しい訓練、教育の最中であったが、今でもその情景の一つ一つが眼に浮び、胸躍る想いで思い出す出来事について書き留めておきたい。

五月二七日海軍記念日（日露戦争で東郷元帥がバルチック艦隊に勝利した日）の翌日二八日、神戸において阪神地区航空隊予科練誕生のお披露目の市中行進が行われた。軍楽隊を先頭にして軍艦マーチを演奏し、練習生は七つ釦、白脚絆の第一軍装姿で三宮駅前を出発、生田神社、元町通りを経て、湊川神社に参拝し、阪急会館に至るコースを行進した。沿道はその行進を一目見ようと集まった群衆

筆者



予科練集合写真（18分隊士）

で埋め尽くされ、威風堂々、一糸乱れず整然と行進する姿に小学生は日の丸の小旗を振って見送り、集まった市民は『万歳、万歳』と歓呼の声を上げ続けた。翌日の新聞でも大見出しでその時の様子が詳しく報じられた。行進するうちに、日々の猛訓練のことなど一切忘れ、予科練に入隊した誇りで胸が一杯となり、この戦での勝利と国と国民を護るため殉じる決意を固くした。

余談になるが戦後、小学校の同級生の福田一榮（旧姓　松本）と出合った時、その当日、予科練の行進を沿道で小旗を振りながら見ていたと話してくれたが、惜しむらく大勢の人中のことであり双方共お互いの姿を発見出来なかった。

入隊時、二等兵に命じられたが、軍服には階級章も無い烏（海軍用語）。一ヶ月が過ぎる頃になると信号ラッパを聞き分け、言葉遣い、挙措動作が海軍軍人らしくなり一等兵に昇進、やっと軍服に階級章が付き、その後六月に上等兵となり一学期を無事終了。その後適正検査が行われ、操縦、偵察専修の二つに分けての教育が始められた。

そして予科練での六ヶ月間に渡る血の出る様な厳しい猛訓練を受けるうちにそれに耐える気力、体力が涵養され、次第次第に日々の訓練を苦にせずこなせるようになり、追い立てられるように過ごす毎日に時間的余裕を感じるようにさえなってきた。そんな中、十月一日海軍飛行兵長を命ぜられ予科練教育を無事修了した。とは謂うものの、次の教程予定の飛練での教育が定員満杯の為、延長教育となった。一日でも早く飛行練習をと気は焦るもののこればかりは止むを得ない。

海軍飛行予科練習生心得（抜粋）

服装容儀

軍人ハ内容ノ充実ト共ニ服装容儀亦端正ナルヲ要ス

服装ハ容儀ト共ニ心性ノ顕現ニシテ又之ヲ粛正スル為ノ最良ノ手段ナリ

練習生ハ常ニ着装ニ注意シ容儀ヲ整ヘ以テ心性ヲ正頓ナラシムヘシ

一、服装容儀ニ関シ一般ニ準拠スヘキ事項左ノ如シ

一　被服ハ塵ヲ払ヒテ正シク着用シ又折目ヲ正シク畳ムヘシ

二　被服ハヨク身体ニ合セテ着用スヘシ

三　姓名ハ墨ニテ明瞭ニ記入シ置クヘシ

四　軍帽ハ正シク前ヲ深目ニ冠ルヘシ

五　帽日常ハ真直ニカケ結ヒ目ヲ開カサル如ク注意スヘシ

六　事業服ノ襟ハ正シク折紐ヲ確実ニ結フヘシ

七　釦「コハゼ」ハ見エサル所ニテモ脱レタル場合ハ直チニ着ケ置クヘシ

八　汚物ハ速カニ洗ヒ洗濯ハ濯キ方ヲ充分ニシ皺ヲ延シ乾スヘシ

九　針ニ親シミ破損セル被服ハ直チニ繕フヘシ
一〇　頭髪ハ二週間ニ一度ハ必ズ刈ルヘシ
一一　髯ハ自ラ剃リ得ル如ク練習シ置クヘシ
一二　時々鏡ヲ見正シキ姿トナルヘシ
一三　「休メ」ノ命アルモ雑話スルヘカラス

二、軍装ヲ着用スヘキ場合左ノ如シ

祝祭日　記念日　日曜日　外出日
自　四月一日　至　九月末日
　朝食後ヨリ食後迄
自　十月一日　至　三月末日
　朝食後ヨリ翌朝朝食時迄

儀式諸点検
自　四月一日　至　九月末日
　午前朝食後ヨリ儀式諸検終了迄
　午後午食後ヨリ儀式諸検終了迄
自　十月一日　至　三月末日
　午前朝食後ヨリ儀式諸検終了迄
　午後午食後ヨリ儀式諸検終了迄

平日
自　十月一日　至　三月末日
　夕食後ヨリ翌朝朝食迄軍医官ノ指定スル患者ハ終日

其他特令アル場合

三、事業服ヲ着用スヘキ場合左ノ如シ
一　隊内ニ在リテハ軍装ヲ着用セサル場合
二　教練演習実習等特定ノ場合

四、掃除服ヲ着用スヘキ場合左ノ如シ
一　飛行及整備教務作業中
二　其他特ニ汚染作業ニ従事スル場合

五、運動服、運動靴ヲ着用スヘキ場合
一　体操、体技（球技）等実施ノ場合
二　靴摺等ノ為軍医官ノ許可ヲ得タル者ハ運動靴ヲ着用スルコトヲ得

六、略帽ヲ着用スヘキ場合左ノ如シ
一　儀式点検以外隊内ニ於ケル場合

二　教練演習実習等特定ノ場合

七、練習生ハ名札ヲ左胸部ニ着用スヘシ。但シ儀式点検及外出時ニハ之ヲ着用セサルモノトスル

八、名札ノ装着法左ノ如シ

一　事業服ノ場合：左外「ポケット」内側上端ニ装着

・予科練訓練総括

耐え得るか　堪えられぬ苦痛なし
過去の苦痛　それは確かに耐えられた
現代の苦痛　それは確かに耐えている
苦痛が増せば増す程耐え得る力が先に増す

・予科練の精神教育

聖訓五ヶ條

一　軍人ハ忠節ヲ盡スヲ本分トスベシ
一　軍人ハ礼儀ヲ正シクスベシ
一　軍人ハ武勇を尚フベシ
一　軍人は信義ヲ重ンズベシ
一　軍人ハ質素ヲ旨トスベシ

五省

一　至誠ニ悖ルナカリシカ
一　言行ニ恥ヅルナカリシカ
一　気力ニ缺クルナカリシカ
一　努力ニ憾ミナカリシカ
一　不精ニ亘ルナカリシカ

予科練、海軍兵学校では毎日温習（自習）時間があり、その終了時、日直の練習生が前記の五省を唱え、その後各々反省録を書き班長に提出する決まりがあった。（五省は今も就寝前に実行している。）　そして、数々の死戦を乗り越えてきた教員から折り有る毎に

『スマートで目先が利いて几帳面、負けじ魂これぞ艦乗り』
『生きてさえ居れば何とかなる。命の有る限り信念を以って敢闘せよ』
『生きている限り命を大切にするのが生命力』
『状況の人となれ、即その場で対応出来る人』
『艦が沈む。命の有る限り一緒の家族であり、最後の最後迄同じ釜の飯を喰うた血肉を分けた者以上の命を懸けた仲間であることを心に深く銘じて帝国海軍軍人として心得ておけ』等海軍魂を叩き込まれ、
『予科練の基本教育の厳しい訓練は、貴様等が可愛いからこそ一日も早く一人前の兵隊に成る様訓練して居るのだ』と叱咤激励を込めた怒声が飛んでくる。ぐうの音も出ない。

・日課（総て信号ラッパか拡声器の放送）

○四四五　総員起し一五分前。
○四五五　総員起し五分前。
○五〇〇　総員起し吊床上ゲー。
○五一五　朝礼、点呼、軍艦旗掲揚、明治天皇御製奉唱、海軍体操。
○五三〇　日課手入レ、掃除整理、洗面。
○六一五　朝食（主食…米七分麦三分の飯）。
○七一五　温習（自習）始メ。
○八〇〇　温習止メ。
○八三五　課業整列、訓示、号令演習（当直将校から指名された者が、号令台に上がり行う）。
○八四五　一次課業始メ。
○九三五　一次課業止メ、休憩。
○九四〇　二次課業始メ。
一〇二五　二次課業止メ、休憩。
一〇三五　三次課業始メ。
一一三〇　三次課業止メ。
一一四五　午食、休憩、靴磨き、洗濯等。
一二四五　課業整列。分隊被服、容姿点検（日にち指定で行われる。着ている服の襟、靴下迄点検され、汚れ、シミが見つかると『不精者』の一喝の声と共に顔面への鉄拳制裁）。
一三〇〇　四次課業始メ。
一三五〇　四次課業止メ、休憩。

一四〇〇　五次課業始メ。
一四五〇　五次課業止メ、休憩。
一五〇〇　六次課業始メ。
一五五〇　六次課業止メ、休憩。
一六〇〇　七次課業始メ。
一六三〇　七次課業止メ、休憩。
一六五〇　夕食。
一七二〇　入湯。
一八〇〇　温習始メ。
一九〇〇　休憩。
二〇〇〇　温習止メ、甲板清掃。
二〇三〇　巡検一五分前、吊床下セ。
二〇三五　拡声器からトロイメライ、ウィーンの森の物語、美しき青きドナウ等クラシック音楽が流れ、それを聴きながら、吊床の中で過ごす（一日の疲れを癒す海軍ならではの粋な計らい）。
二〇五五　音楽終了、巡検五分前。
二一〇〇　巡検。（一日の終了）

・通信（モールス信号）別名出ベソ叩き

モールス信号の符号は七二ケ。それを覚える為に各人に竹笛が渡され、それを吹いて符号と音を一致させる。起信…―・　応信―・―で始まり本文―…―　終信…―で終わる。受信した音を文字転換し受信用紙に書き込む。又、送信用紙に書き込まれた文章をモールス信号に変換し、送信する。それを一瞬のうちに行わなくてはならない。音楽の音符記号のオタマジャクシよりも難しかった。

教員から『一字の誤字で聯合艦隊が全滅するぞ。』怒声が飛んで来る、習いたての頃は、誤字が一字でもあると顔に一発見舞われる。一分間に百字の送受信試験では、一字の誤字で五点減点、百点満点の試験でマイナス点になると海軍精神注入棒によるケツバッター、必死で覚えるしかない。モールス信号を覚えるのに竹笛を吹いた。時間さえあれば皆が竹笛を吹くものだから隊内のいたる所で竹笛の狂想曲が満ち溢れた。ある時、『模範送信ヲ受信セヨ』と通信教員から送信されたモールス信号は一分一三〇字送信で『ベラベラ島からベラフベ島まで』であった。

ベラベラトウカラ、ベララベトウマデ

応信
―・―

起信　へ　濁点　ラ　へ　濁点　ラ　ト　ウ　カ　ラ
…―・　・　：　…　・　：　…　：―：　：―　・―：　…

へ　濁点　ラ　ラ　へ　濁点　ト　ウ　マ　テ　濁点
・　：　…　…　・　：　：―：　：―　―：―　・―・――　：

解信　終信

・―・　…―・

長符と聞き間違うほどの短符の早打ち連打で意味不明、全く聞き取れなかった。その通信教員は高等科マークと山型三本（海軍歴三年で山型マーク一本。三本で海軍歴九年以上）、一刻を争う実戦で鍛え上げた凄腕に只、只、驚嘆した。このような文章を一分間に送受信出来る様になる為、その通信教員から猛特訓を受け、また、鉛筆で机を叩き会話したり、手信号手旗信号で会話したりと必死になって覚えた。卒業時には一分間で送信一〇〇字受信一四〇字間違えずこなせるまで腕をあげた。

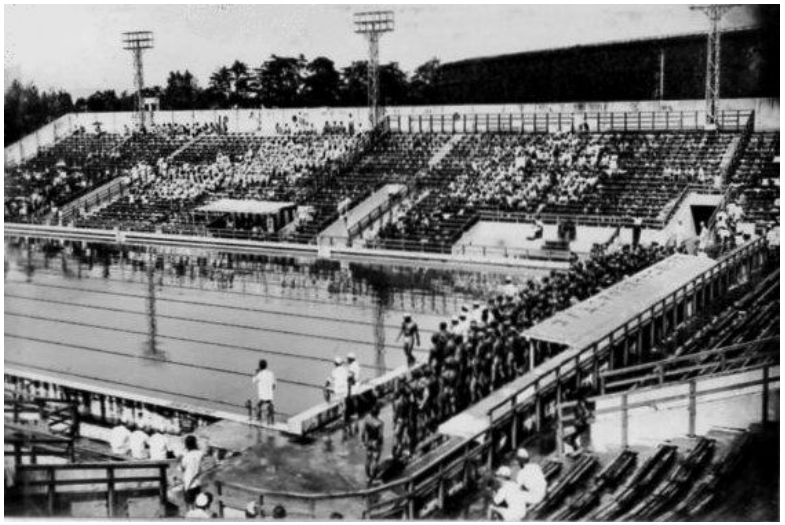
モールス信号以外に発光信号、手旗信号、手信号、旗旒信号、天体観測等も覚えなければならなかった。発光信号は、電球の点滅を利用してモールス信号の符号を送受信するもので、遠く離れた船から送信される発光信号を瞬きもせず見続け素早く、手に持った手板の受信用紙に書き込まねばならない。書き込む際は受信用紙を見ずに左手で探りながら文字を書くものだから書き連ねた文章が交差したり、離れていたり何を書いたのかさっぱり判らない。おまけに潮風吹く中、暗闇で発光信号を瞬きもせず見続けると眼から涙が溢れ出て発光信号がぼやけて読み取れなくなり判読出来ず受信不明。これも訓練により何とか出来るようになった。

このような予科練での教育を通して体得した事は、ここまでが自分の持てる素質、能力、実力である、もはやこれまでと諦めるのではなく、毎日の厳しい訓練と投げ出さず継続する事、そして人並以上の努力により、自分で思い込んでいた限界を超えたモノが自分の中から引き出され、発揮されるということであった。

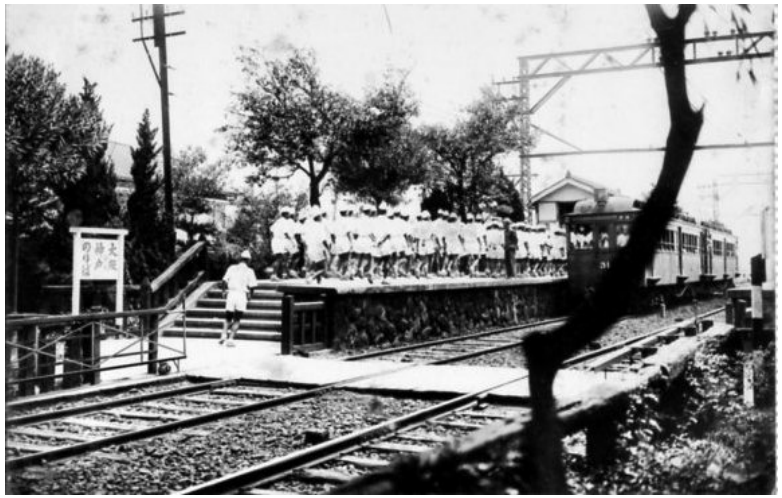
・水泳

どの程度泳げるか調べる為、分隊毎に甲子園プールへ行った。その場で全く泳げない者、普通に泳げる者、泳ぎの達者な者の三組にふるい分けられた。金槌組は、水に慣れるため、教員が金槌組の頭を鷲掴みし、水の中に無理やり押し込んでの訓練から始まり、次に水に浮くこと、泳げるようになるまでを教員から教えられた。泳げる者は飛込台からの飛込み練習をする事となった。飛込み練習では、最初に三Mの高さから、その次に五Mの高さから、最後は十M高さから飛込みであった。とは言え、自分の目の位置の高さ約一M余りが自分の飛びこむ高さに更に加わっている様感じられる。最後の十Mの高さからの飛込みでは、怖くて下を見る事さえできない。教員から「此の高さは艦の甲板の高さだ。飛び込めなければ艦諸共沈没するぞ。飛び込め！」と怒鳴られ、指揮棒が飛んで来る。目を閉じ気合い諸共飛び込んだ。　やっと全員が泳げるようになると、鳴尾浜での特訓が始まった。まずは波に慣れる訓練、それが終わると、一〇ｋｍの遠泳。先頭は普通に泳げる者、中間は泳ぎが苦手な者、後尾は泳ぎが達者な者に分けられ、落伍者を拾い尻から押して助けながら泳いだ。一ヶ月足らずで、全員が一〇ｋｍ泳げ

るようになった。先任教員曰く「全員よく頑張った。其の時の状況の人と成り全力を尽くせば必ず出来る。『駄目だ。』は死んだ時に言う言葉だ。人間には想定以上の力が有ると信じて行動せよ。」その言葉は私の座右の銘となり、実行している。



甲子園プール水泳大会



阪急甲東園駅-水泳大会出発

・体操　体技　武技

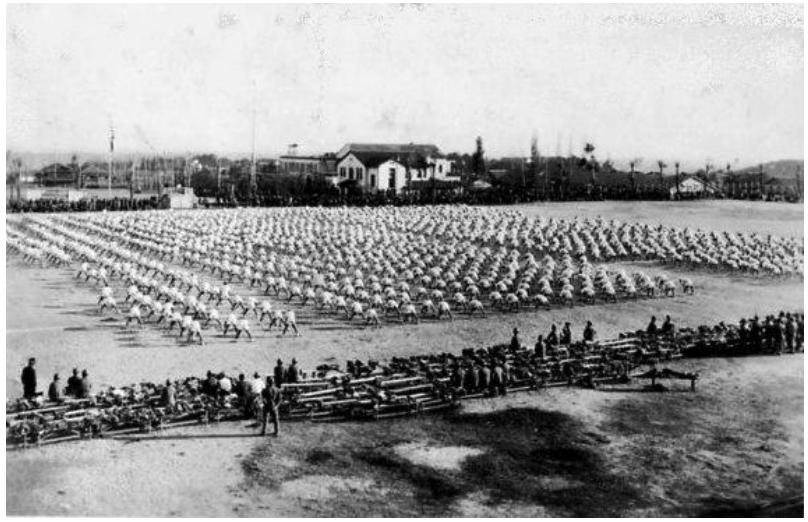
甲子園プール飛び込み訓練

海軍には、デンマーク体操をヒントに考案され体の柔軟性と筋力の強化を目的とした海軍体操第一、第二が有った。誘導振の号令で手を前横に振ることから始まり、終了までリズミカルに動きを揃えて行う様マニュアルで決められていた。練兵場において練習生千二百名が真っ白の体操服姿で一糸乱れぬ動きで体操する姿は壮観で、その時の写真を見るたびに当時の事が思い出され胸躍る。

体育館でも様々な体操、体技を行った。「膝立体後屈」という難しい用語の徒手体操を二時間休みなしで行うと冬でも汗びっしょりとなり、飛び散った汗で床が濡れてしまい、ソーフ（雑巾）で拭き取っていた。平衡感覚を養う為にマット体操も行われた。マットの上を何回となく回転した。二m先のロープを空中転回で飛び越す体技では、尻もちを着くと教員から顔面に一発が飛んで来る。六段の飛箱を4m助走し飛び越える体技では身長の低い者は悪戦苦闘、教員はこれ見よとばかりに見事なフォームで軽々とこなしてしまわれる。操転器（パイプで出来た身長大の円形状の檻）に入り、大の字になって前後左右斜めとあらゆる方向に回転し平衡感覚を養い、平行棒、吊下がりフックで腹筋力強化をしたりと様々な体技を行った。最初の頃は朝の厠で腰を下ろすのも苦しんだが、動きだすと柔軟になってきた。

体技ではないが、階段を二段ずつ上るのを一段ずつ上がっていると、それを陰で見ていた教員から「待て！」の一声がかかり、「止め！」の声がかかる迄そのままの姿勢、『だるまさんがころんだ』じゃないが少しでも動くと「聞こえんのか！」の声と共にモーニングサービス宜しく顔面に一発飛んで来る。「腕立て伏せ始め！」の号令で一斉に腕立て伏せをするのだが、「止め」の号令がかかる迄いつ終わるか判らない。時間の経過と共にだんだん苦しくなってくる。号令をかけた教官の姿が見えなくなり、床に腹をつけてしまおうものなら陰から見ていた教員が飛び出して来て、「貴様等タルンドル！全員時間延長！」の一声。一時間休みなしで行うと汗が雨垂れの様に床に落ち、びしょ濡れになる。皆に迷惑をかけてはいけないと自分で自分を励まし歯をくいしばり必死になって頑張った。

武装競技



海軍体操

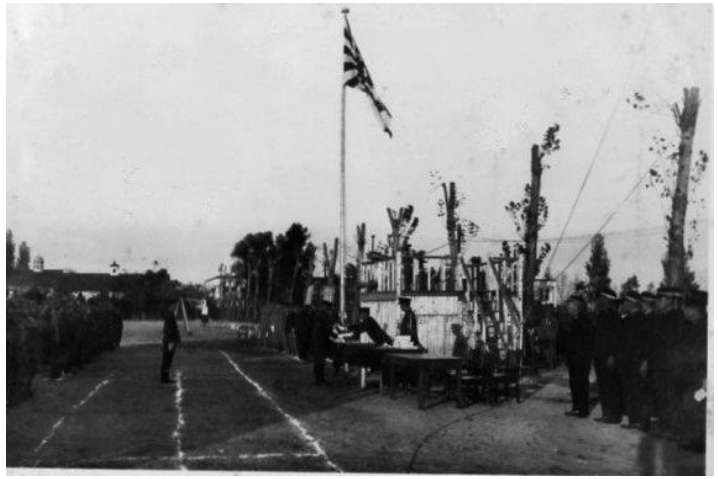
操転器

幅跳び

武技では、中学校の武道の時間で学んだ剣道柔道を選択した。寒稽古、分隊対抗戦も行われた。　耐寒訓練では、六甲颪吹く中、全員褌一つの姿で訓示を拝聴、その後薄氷の張るプールに人差し指を胸元で立てたまま五分間入った。その後、体操パンツに着替え、上半身裸で一〇ｋｍ駆足。落伍者が有ると迎えに行くためにさらに数ｋｍ駆足で探しに出かけ、駆足で戻ってこなくてはいけない。これを毎朝行っていると、甲子園浜での遠泳の要領宜しく先頭は体力、駆け足が普通の者、中間は駆足が苦手で体力が今一つの者、後尾は体力、駆足自慢の者で隊列を組んで出発し、落伍しそうなものを助けながら帰隊した。

5000m競走

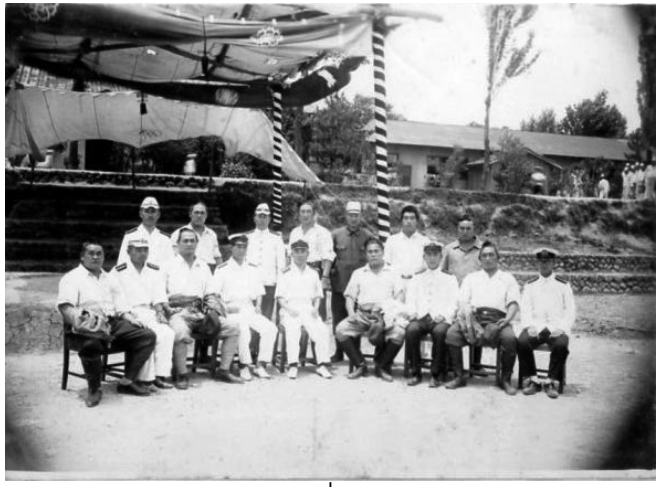
俵担ぎ



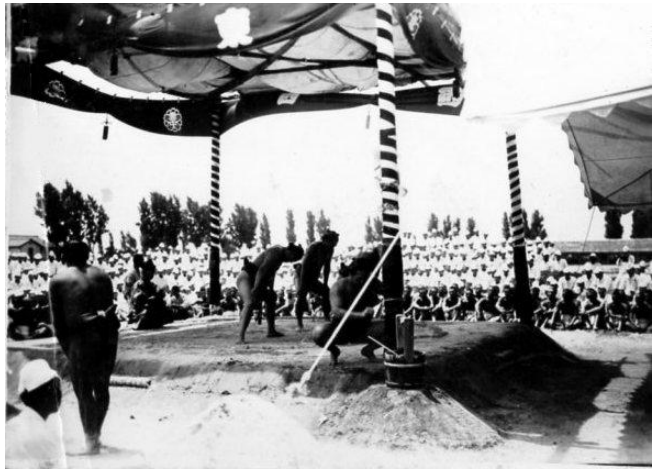
表彰式

障害物競走

海軍相撲も行われた。普通の相撲は勝ち残りだが、海軍相撲は負け残り。教員から交代の声がかかる迄土俵の内外を転がされ、フラフラになっても相撲を取り続けなくてはいけない。もちろん体は擦り傷だらけとなり、そこに赤チンが塗られる。体中マンダラ模様となり、まるでキリンが褌をつけて相撲を取っている。土俵開きの際は、神風親方一行が来隊し、胸を借りた。いくら体当たりしても厳の如く跳ね返され全く歯が立たなかったのも忘れられない想い出の一つとなっている。



神風親方集合写真

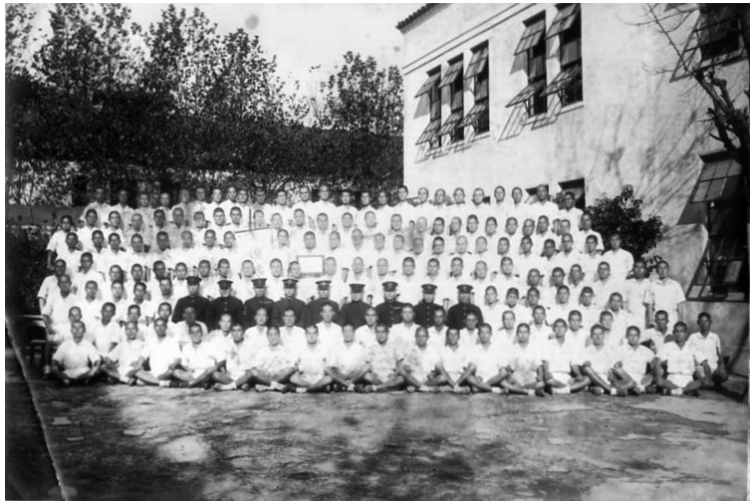


神風親方土俵開

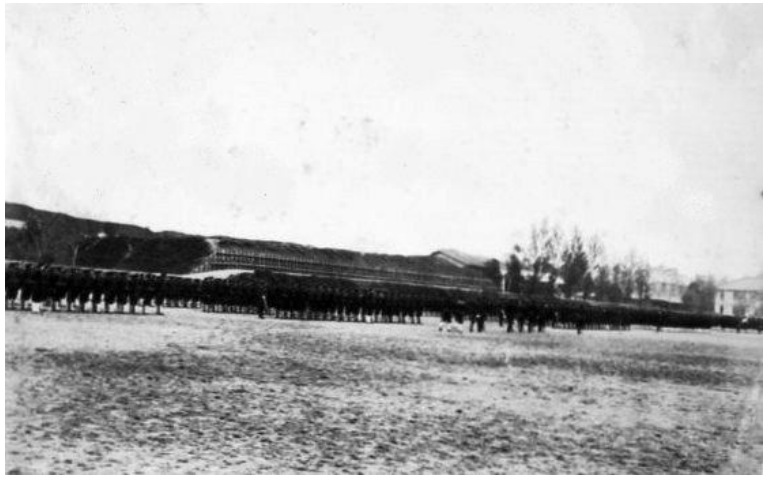
神風親方一行と相撲大会

そして土曜日の午後、大掃除後に行われる予科練名物、分隊対抗棒倒しについてもふれておきたい。まず、全分隊を半分に分け、その後、分隊（一五〇名）毎に人員の半分を攻撃隊と守備隊に分ける。守備隊は更に人櫓を組んで棒を守る者と攻撃隊に立ち向かう者とに分かれ、どちらかの棒が倒れる迄行われる。棒には勝つと赤、負けると黒の線が刻まれるのだがそれだけでは済まず、負けると上陸（海軍用語で休日外出の事、右舷、左舷に班分けされ交代で外出）か酒保（おやつ）止めの罰直が待っている。連敗しようものなら月二回の上陸が出来なくなり一ヶ月間隊内で過ごさなければならない。ルール無しで掴みかかる、殴る、蹴る、タックルする、人梯子を作り棒に向かって駆け上がろうとする、それを防ごうとする等々、皆捨て身で必死に戦う。敢闘精神、団結心で逞しくなっていった。同期の桜の蕾が膨らみ始め形となり、練習生皆が死を恐れずに何事にも立ち向かう眼光鋭い軍人らしい面構えとなっていき、教える者と学ぶ者が互いの垣根を超え一心同体となり歓び、悲しみを真に分かち合える様になって行った。

半年過ぎた頃、人間の能力は教育と訓練により自分の思っていた限界を超えどこまで伸びるか判らないと確信した。



予科練運動会-優勝記念写真



予科練閲兵式行進

・陸戦（陸上戦闘）

海軍において陸戦訓練を行うのは陸戦隊のみと思っていたが、まず、突撃匍匐前進の基礎訓練を行った。そして、真夜中に、非常呼集の号笛を合図に一斉に飛び起き、完全武装で中庭に集合し、駆け足で宝塚ゴルフ場まで行き陸戦訓練を行

った。海軍は大砲の操作に重点が置かれ、陸軍ほど小銃に対する教育は行われず、手入れ等も1～2回しか行わなかった。また行軍も陸軍ほど重装備で行われず助かった。　宝塚ゴルフ場に着き、一体どんな厳しい訓練が行われるのかと思っていると、訓練は少しだけ、教員から「演藝会を始める。開け」の号令で演藝会が始まった。練習生が皆我先にと自分の十八番を披露、普段は終始厳しく怖い教員がニコニコ顔でその様を見入り、終始和やかなひと時であった。入隊以来厳しい訓練の毎日の中にあっては、まさに極楽。教員の粋な計らいに練習生皆が驚くと共にその温かい心遣いに感激した。その後、教員に対し親しみ、信頼の絆が深まり、心の通じ合いが生まれた。

・数学・航法

特別教育で文官（大学教授で将校待遇）よりサイン、コサイン、タンジェントを重点に航法を学んだ。航空母艦より指揮官機に先導されて敵基地に向けて出発、戦闘終了後、単機で帰還しなければならない。発艦前に現在位置と進行方向、速度、風速を知らされるが太平洋のど真ん中、海と空しか見えない洋上で戦闘機の操縦、現在位置から帰艦迄の最短距離、消費燃料等計算を総て一人でしなければならない。計算を誤ると一命を落としてしまう。まさに命懸けの勉強で有った。

・洗濯

冬になっても一切火の気のない生活。その上、襦袢一枚と事業服だけで一日中走りまわっているから寒さが身に応えた。霜焼け、凍傷で手足が真っ赤に腫れ上がり、ひどくなると皮膚が剥け、掴んだり握ったりしようものなら骨まで見える。医務室に行き薬を処方してもらい患部に塗るのだが効き目なし。そんな状態になっていても洗濯はしなければならない。奈良のお水取りが過ぎればいくらかましになると思いつつも水道水の冷たさが骨身に沁みる。下に色物を重ねその上に白の肌着、軍足、事業服を置いて洗石（洗濯石鹸）でゴシゴシこすり、襟元に付いた汚れ、シミを真っ白になる迄洗い落とす。もちろん手はかじかんで真赤となる。凍傷、霜焼け組が洗濯物の取り入れ、そうでないものが洗濯担当となり助け合う。被服点検で汚れが見つかれば皆で罰直を受けなければならない。たかが洗濯どころではなかった。

・食事

毎日交代で食事当番が烹炊所に行き主計兵に分隊名と班名を報告して、飯、汁、おかずが人数分入ったアルミ製の食缶を持ち帰り各人に分配する。それが完了すると教員室に行き班長に「食事用意ヨロシイ」と報告し、班長が班長席に着かれるとそれに続き一同着席し「頂きます。」の声で食事が始まる。皆あっと言う間に食事を平らげる。食器は錨マークの付いたアルミ製、箸は竹製。『嫌じゃ有りませんか軍隊は。カネの茶碗に竹の箸。仏様でも有るまいに。一膳飯とは情なや。』の言葉通りで、入隊当初、一日三、〇〇〇キロカロリーの食事であったものが、訓

練が烈しくなると4、000キロカロリーに増やされたもののお腹一杯迄には程遠い。そのうちこの満腹感無き空腹感と呼べるものに慣れるかと思いきやお腹一杯になるまで食べたくて仕方ない。それでも身長は伸び、筋肉質な体格となり軍人らしくなってきた。

週一回、酒保から駿河屋の羊羹、菓子飴、干バナナ、冷凍ミカン等支給された。冬でも冷凍ミカンが支給されたがどんなに寒くても残さず食べた。罰直を受けると酒保止めとなり支給なし。酒保止めで余った饅頭は誰のお腹の中に入ったのやら、まさか酒保の饅頭が足らず罰直を受けたのか今となっては判らない。

だが、正月と海軍記念日は特別食が支給された。赤飯といつもより肉と魚が多めのおかずが出され大喜びで食べた。只、正月の雑煮に入っていた切餅は中まで火が通っておらず固い餅に齧り付いて食べる他なかった。そして、ガンルーム（将校食堂）の烹炊所の前を通ると何時も旨そうな匂いが流れていた。いつもお腹を空かした状態の練習生にとっては強い刺激で有り、腹の虫がゴロゴロと大きな音を立てるのを押さえる事が出来なかった。又、温習時間に各自食べたい物の絵を描き見せ合ったのも忘れられない。それぞれの絵に食に対する飢餓感と言うか鬼気迫る物が乗り移っており、ボタ餅に付いた小豆餡の一粒一粒から旨そうな白い湯気が出ている絵が有るかと思えば、巻き寿司を描いた絵があり芯の部分の具を見ると思わずかぶり付きたくなる。まさにそんな絵のオンパレードであった。

・罰直

歴戦の教員達からすれば練習生は皆目怠く思え、伝統有る帝国海軍軍人として恥じない様育てるため罰直と言う厳しい体罰が存在した。

一日の終了を告げる巡検が済んだかと思うと、「総員集合」「デッキニ整列」の号令で吊床から跳ね起き全員整列。「貴様等は最近タルンドル！」と教員が声を荒げ皆の顔を一通り舐めるように見たかと思うと理由も云わず「よく考えてみよ。各人一人ずつ前に出よ。」との命令。一人ずつ列から一歩前に進み出、両手を上げ前に屈む姿勢をとったところで順番に尻に一発、二発と手に持った海軍精神注入棒が撃ち込まれていく。ずしりと重い音と同時に発せられる呻き声がだんだんと自分に近づいて来る。恐怖と不安がどんどんと高まり、自分の番迄あと何人と数えたくもないが数えてしまう。自分に達するまでの時間の長い事、苦しい事。最後には腹も据わり何本か打たれる。もちろん尻には見事に腫れ上がった紫色の内出血の跡が残る。幸いにも自分の身に降りかからなくとも夕食後の風呂で仲間の尻に出来た生々しくも見事に紫色に変色した内出血を拝まざるを得ず、明日は我が身と見て見ぬふりをしても今晩の巡検の如何が脳裏をかすめる。しかし、不思議な事に段々とその痛みにも慣れ、耐えられるようになってくる。

また、陸軍では菊の紋章が刻まれた三八式歩兵銃の手入れが大変で罰直の大きな

理由の一つになっていたが、海軍は小銃で手入れせずとも罰直の対象とならず助かった。

そして、そんな毎日を送っていたある日、同郷（宍粟）出身の十一分隊士田内少尉（土万）と井上上等兵曹(千種)の目にとまり別室に呼ばれ、お菓子を頂戴し食した事は忘れ難い想い出の一つとなっている。

厳しい訓練を終え、腹ペコの状態でやっと食事にありつけたと思ったら又もや罰直。食事の用意が整ったテーブルを皆で持ち上げ支える。そのままの姿勢が暫し続くのだが、訓練で疲れ切った上に空腹が重なる。耐えきれず腕力の弱い者が腕を下げると当然のことながらテーブルが傾き上に乗っていた食器が次々と腕を下げた者の方向へと滑り落ちて行く。一食分食事無し。痛くはないが食べ盛りの人間には誠に辛い罰直で有った。

吊床のロープの締め方が緩いと又もや罰直。吊床を担ぎ練兵場を五周走る。走っているうちに吊床の中の毛布が落ちる。雨の日などにこれをやると堪ったものではない。　他にも牛殺しの刑。親指と人差し指で輪を作り、勢いよく人差し指を親指から離し額の中心部に向けて人差し指を跳ね上げ打ち付ける。思わず目から涙が零れ落ち、頭の芯までズキズキと痛みが走る。

戦地においては一人の失敗、落伍が全滅に繋がることがある。隊員一人の失敗に依る罰直を全隊員が受ける。罰直を受けないようにするにはどうすればよいか。自然に皆が助け励まし合い一致団結していった。

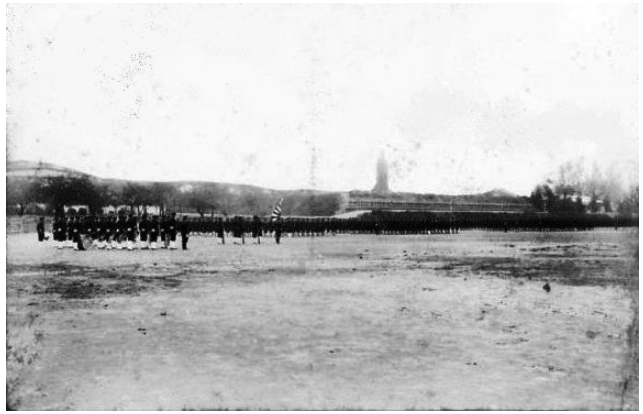
帝国海軍にはその他紹介しきれないほどの罰直が有るのだが、理に適った思い遣りのある罰直も存在したので紹介しておきたい。入隊して一ヶ月が経った頃、「総員整列」の号令がかかり整列、一体何が始まるのか思っていると先任教員から「各自洗石ヲ持ッテ集合！」との号令、皆一目散に自分の洗石を取りに戻り再び整列。洗石を紛失した者がいないか調べるものとばかり思っていたら、各自の洗石の大きさを見て「洗石ノ大キイ者ハ一歩前へ」の号令で有った。不思議な号令が有るものと思っていると「ヨク洗濯シテ居ル者ノ洗石ハ小サク成ッテ居ル。大キナ者ハ全員只今カラ洗濯開始。カカレ！」の号令が発せられ「以外ノ者ハ休憩。」との号令であった。

戦後同期の会が催され、分隊長、分隊士、教員も揃って出席して下さり一同会し盃を酌み交わし思い出話に花が咲いた。苦しかった体験は、懐かしく楽しい出来事に変わる。罰直の話題で座が涌いたのも当然か。

十七の　少年なりき　友と我
生き残りたり　今日は呑むべし

夜が更けるのも忘れ語り合った。

現代の損得勘定がまずありきの人間関係にあっては、それとは全く対極にある誠に稀有とも呼ぶべき次元。国を護るの一心で志願入隊し、命懸けの訓練、苦労、助け合い、時間、時代を共有し、互いに鉄の鎖で固く結びつけられた戦友とは時を超えた今となっても心が通じ合う。不思議な因縁の一言で片づけられない、崇高と呼ぶべき人間愛、人間の完成した姿がそこには存在した。



久邇宮朝融王殿下視察閲兵式

予科練にて・同期の桜（木内君）

・想い出

一九四四年

五月一日　十九連空司令久邇宮朝融王殿下御巡視。

七月　分隊編成替（操縦十一～十四、水偵　十五～十六、偵察十七～十八）

カッター訓練、水泳訓練。

八月　飛込訓練、遠泳水泳大会。

九月　大阪管弦楽団、合唱団の慰問演奏で隊歌合唱（全国放送された。故郷に

に響けと懸命に歌う。

十月　運動会、映画鑑賞。

十一月　平岡養一氏の木琴演奏。

等他に登山大会、野外演習、兎狩り、球技大会、武道大会、通信競技等、体力技能向上と攻撃精神涵養を目的とした様々な競技、大会が開催され充実した毎日を送っていたが、戦況が悪化していく中、延長教育が続き、戦地に赴けない苛立ち、焦りが沸々と湧いてくる。入隊時一緒に過ごした十三期生は今何処でどんな戦務に付いているのか？十五期生は先輩の居なくなった宝塚航空隊でどんな教育を受

けているのか？そんな思いが頭をよぎるが外の様子は判らない。
米軍が硫黄島に上陸。西宮航空隊、宝塚航空隊、奈良航空隊、高野航空隊が二十四連空編成され戦備体制となる。防空壕掘りの土科練？が作業に組み込まれるも通信等の日課で技能低下しない様に訓練が続けられた。
十二月　空襲警報発令、教育戦闘配置訓練も始まり、隊も第四戦斗配備となる。

一九四五年
一月　警戒警報。
二月　空襲警報、対空戦闘発令。
三月　阪神大空襲。B29が焼夷弾による無差別爆撃。打ち上げられた花火が爆発し火の帯が地上に落ちて行くが如く爆弾が地上に一斉に降り注ぎ着弾するや一面火の海と化して行く。余りにも凄まじい光景であり、今でも目に焼き付いて離れない。
その後、米軍の沖縄慶良間列島上陸に続き、硫黄島玉砕と日本の外堀、内堀を米軍が埋めて行く中、神戸警備に出動する。　新聞の第一面には特攻隊の戦果（海軍は神風の名が頭に付き、陸軍は〇〇隊のみ）が大々的に報じられ、「本土決戦」「一億一心火の玉」等の文字が躍っている。

西宮空から姫路空（加西市鶉野）に二回に分けて、九会小学校と北条小学校に分宿し戦備作業に派遣された。その折、姫路空から神風護皇白鷺隊（九七式艦上攻撃機二十一機、総員六十三名）の出撃を見送ることとなった。そして別盃は、現在の神戸大学農学部の有る所で行われた。プロペラが回り始めエンジン音が高まる中、「総員帽振レ」の号令がかかり皆、機が見えなくなっても帽子を振り続けた。機上では挙手の敬礼で返礼、次々と大空の彼方に吸い込まれる様に飛び立っていった。

戦後、地元の方々からその地に平和の碑を設立しようとの声が上がり、また、姫路空に関係した各部隊に趣旨書が送られ、一九九九年に記念碑が建立された。碑にはこの地より特攻隊として出撃、敵艦に体当たり散華された勇士の名が刻まれている。また、その碑には私の同期の桜であり心友、赤刎正夫君が詠み編纂した予科練歌集の中の一編「鶉野の夕焼け」が刻まれている。

美しく　空に果てたり　鶉野の
空夕焼けて　朱くたゆとう

西宮空　赤刎正夫

そして、碑の横には軍艦旗が掲揚されており、朱い夕焼け雲の彼方から「我々は国を護るの一念で命を捧げた。何一つ心残り無し。生き残りし者は、我々の心中を察し此の大和の国日本を世界に冠たる国とし繁栄させる事を願う。」との声が聞こえてくる。

五月　川西航空機甲南工場の警備の任にあたっている時、空襲に会い戦死者を出した。この空襲で零戦の次期戦闘機紫電の生産工場を焼失したが、日本毛織姫路工場で生産が再開された。紫電は姫路空でテスト飛行しその後納入された。

Ｂ２９による空襲は最初、軍関係の施設に限定されていたが、次第に大都市、非戦闘員の居住する住宅地への無差別攻撃へと変化し、焼夷弾と爆弾による攻撃で焼け野原が拡がって行った。

本土防衛の為、米国艦隊に対し航空機による特攻攻撃が行われた。そして、海軍の象徴である戦艦大和を往きの燃料しか積まず沖縄救援に派遣するも、その道半ばで撃沈され三千六十三名の戦死者を出すに至り、米軍の本土上陸を目指した攻撃は緩むことなく更に苛烈の度を増すばかりとなった。

-姫路航空隊平和記念碑
（加西市鶉野）

五、特攻志願　（一九四五年　五月　十七歳）

五月二〇日午前西宮空在隊者で午後姫路空派遣者は隊近くの万願寺川の河原に総員集合の命令が下り、集合整列したが、人払いされたのかそこには教員の姿がない。何か重大発表があるのかも知れないと直感が働いた。福田先任分隊長（兵庫県加東市出身、海兵六十六期、終戦時呉鎮守府参謀少佐）が何時になく厳しい顔で檀上に立ち、「頭中」の号令がかかる中、全員の顔を見渡し答礼、その後以下の訓示があった。

「君達に重大発表があるのでよく聞け。これより此の度新しく完成した水中特殊兵器への搭乗志願者を募集する。今から渡す紙に『熱望者◎』、『希望者○』、『希望せず×』を記入し、明朝迄に各自の分隊長まで提出せよ。」　「貴様達も知っての通り我が帝国海軍は全力を上げ米軍の本土上陸を阻止しようと戦って居るが現在保有する戦力は航空機〇〇機、艦船〇〇隻で有る。残念ながら君達の搭乗す

る航空機は無い。しかし、此の度完成した水中特殊兵器で日本を護る事が出来る。一艦必殺攻撃兵器である。よくよく考えて提出せよ。」との要旨のものであった。訓示後、心の落ち着く場所に行く様指示があり、解散となった。

直感は的中。その場に集合した誰もがこの訓示が特攻志願者の募集を示唆したものであり、搭乗機の存在しない中に有っていつ終わるか判らぬ予科練の延長教育から解放され、国を護る具体的方策への回答が遂に与えられたと感じた。　誰からともなく携帯していた小刀を取り出し、それで指を切り、滴る鮮血を以って二重丸を印し、分隊班氏名を記入し分隊長に提出した。　とは言え何名が選抜され、発表が何時になるのか一切不明であったが、翌日「総員集合」の号令があり、集合整列。その場で選抜者の氏名が発表された。隊員の名が次々と読み上げられて行く。自分の氏名が発表されると「ハイ！」と歓喜の声を以って返事する。誰もが自分の名が告げられるのを今か今かと待つのだが、時間がやたら長く感じられ歓声が沸き起こっては即座に消し様も無い焦燥感に苛まれる。

西宮空所属一、二〇〇人の半数にあたる六〇〇人の氏名が告げられ、「以上」の声で終了。選抜から外れた者は悄然と下を向き必死に涙が零れ落ちるのを堪えている。砂を噛む思い、無念と言う言葉だけでは語れない負のオーラがそこには有った。選抜された者からは残酷にも非選抜者と言うレッテルが貼られた同期の桜に掛ける言葉が見つからなかった。「指名サレタ者ハ直チニ身ノ回リヲ整理シ西宮空ニ帰隊スル用意ヲセヨ。」との命令が下ったのが双方にとっての救いであったのかも知れない。翌朝、北条線法華口駅で「別れの帽振レ」をし、西宮空に帰隊したが、隊内の空気は姫路空のものをそのまま持ち込んだと言ってもよいものであった。

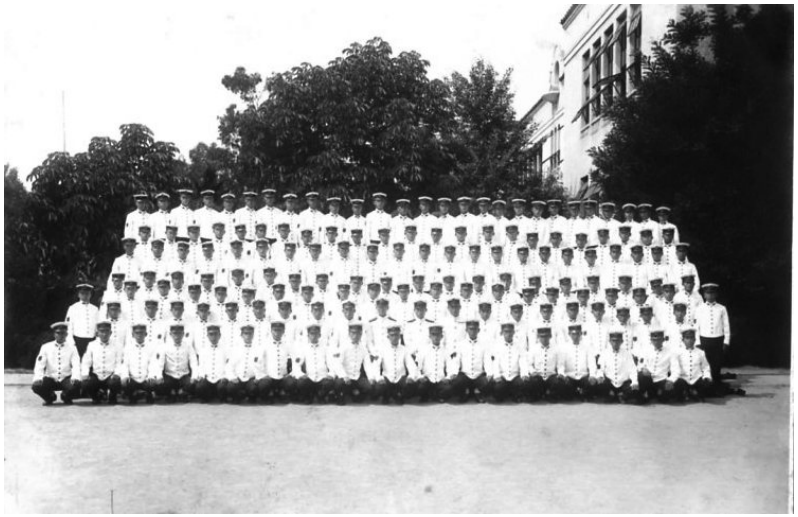
六、帰省　（一九四五年　五月）

二十三日「転勤者集会」が行われ、その席で先任分隊長から以下の訓示を受けた。「二十四日から二十七日まで三泊四日の特別休暇を与える。行先任務については一切軍秘で有るので他言無用。最期の訣れで有るから心残り無き様に。休暇中とは言え大切な体であるから特に気をつけて過ごせ。」誰一人此の様な時に休暇が与えられるとは予想もしていなかっただけに耳を疑うどころか、驚きと嬉しさで頭の中が真っ白になり、思わず喜びの声が飛び出しそうになるのを必死で堪えた。しかし、親に何の相談もせずに予科練に志願し入隊。親元を離れ一年と二ヵ月。その間、厳しい訓練と教育を受けた。同期の桜と呼ぶにふさわしい友に巡り合えた。戦闘機乗りの夢は叶わずとも、日本を護ると言う志は不動、水中特殊兵器による特攻に志願、選抜された。

戦況厳しい折、兵士で有れば『死』は一般人よりはるかに確実な実体となる。特攻と言う現実行為においてはその美名の裏側に存在する実現手段に他ならない。今、『死』への時間設定がなされた。当然の帰結として『生』の残り時間も全く等しく決定された。対極に位置する両者の時間軸はシンクロナイズされているという真理に頭を垂れる。

齢十七歳において、不動の意思をもって自ら特攻と言う行為手段で『死』を迎える決定を下した。事ここに至っては限られた『生』の時間を如何に過ごすか。

予科練卒業写真（特攻隊員選抜者）



予科練－編成替え集合写真

今ここにある『命』を与え、愛情を持って育んでくれた両親、家族の元へ決して語れぬ「国を護る」という大義名分を掲げて一命を捧げると言う覆し様もない決定が下っての帰省でもあった。

とは言え一年二ヵ月振りの帰省である。隊内にいる時は暫し両親の愛情と自分の下した決定との間で葛藤を抱え苦悩したが、隊門を出ると両親に会える喜びで自然と笑みがこぼれ出す。

姫路駅に着き駅舎を出ると、予科練の七つ釦の軍服を纏った自分に全く見知らぬ人から「御苦労さま、頑張って下さい」と声が掛けられたり、目礼されたりした。改めて自分が軍人となった事に身が引き締まる思いがした。途中、山崎町に嫁いだ姉の家に寄り、休暇が貰え今からバスで帰省する旨実家に電話で伝えた。車窓から見える風景に懐かしさが込み上げてくるものの、二度と現世で目もじ叶わぬかもしれぬ両親とどんな表情、態度、振舞い、会話をし休暇を過ごすかに心が迷いに囚われる。ふと、帰宅前に先祖の墓参りに行こうと思い立った。先祖の墓前に向かい手を合わせ国を護る為特攻に志願、選抜された事を報告すると、ご先祖様からお許しが出たのか心の中に立ちこめていた深い霧の様なものがすっと晴れた。

玄関に立つと思わず破顔となり「帰りました。」と大きな声で帰宅の挨拶をした。すると、家の中から両親が走り出て来た。久しぶりの親子の対面、喜び、戸惑い、吃驚そんな表情が一瞬の内にあらわれたかと思うと、両親の口から出た出迎えの言葉は「何故報せも無く急に帰って来たのか？」であった。心の中で何十回も反復問答練習した言葉「急に転勤命令が下り、三泊四日の休暇がおりました。二十七日に帰隊します。転勤先は報らされていないので分かりません。」が普段と何一つ変わらない態度、声音で口から飛び出した。その返事を聞いた父（日露戦争時、姫路野砲聯隊入隊、満州旅順に出兵）は、私の頭のテッペンから爪先まで見、「軍人らしくなった。」と誉めてくれた。まるで劇の一場面の様であった。

その日の夕刻、近くの親戚も集い、田舎とは言え物資不足の中ではあったが持ち寄りの祝いの夕餉が開かれ、家で飼育していた鶏や池の鯉も食卓に供された。暫くアルミの食器で食事をとっていた者にとっては陶器の食器に盛られたおかずやご飯は人肌のぬくもりを感じさせるものであり格別に美味しくお腹一杯頂いた。また、その夕餉を聞きつけた親しく付き合いのある人達も駆けつけ誠に楽しい一夜であり、参集して下さった方々に心から感謝した。その後、久しぶりに時間を気にせず一人で入る風呂、巡検ラッパを気にすること無く畳の上に敷かれた布団に入ることに懐かしささえ感じ熟睡した。翌朝は起床ラッパなしで起床。朝食の湯気の立ったおふくろの味の味噌汁は最高であった。

朝食後、予科練の七つ釦の軍服姿で氏神様である播磨の国一宮伊和神社に参拝に出かけた。戦友へのお土産にとお守りを買いに社務所へ行くと宮司さんから武

運長久祈願の御祓いの申し出があり、有り難くお受けした。そして、「この若さで国の為に戦場で戦って下さるのですね。心よりお礼申し上げます。頑張って下さい。」と温かい激励の言葉まで頂いた。そして、参拝していた人達も「万歳」の声で励まして下さり敬礼で答礼した。その当時、予科練は航空兵の花形的存在となっており、実家のある神戸村では数名が予科練に入隊したのみで映画館において上映されるニュース以外で予科練の軍服姿を見る機会がなかったせいか伊和神社からの帰途、子供たちが予科練の歌を歌いながら付いてきた。

その日の午後、家の裏山の宮山に出掛けた。そこは数々の思い出の詰まった場所であった。草の上に寝転び空を見上げ浮かんでは流れ、形を変えては消えていく雲を眺めていると小学生の頃、学校から帰ると宿題もせずランドセルを放り出し此処に来て木製の橇で友達と一緒に滑り下りた事、自生していた『イタドリ』を食べた事、薬草の『センブリ』を見つけ摘んで帰り祖母からお駄賃を貰い駄菓子を買いに行った事等次々と楽しい思い出が蘇えってくる。

今ある「生」を慈しみ味わうも、自分で決定した「死」に対してはどこまでも天高く澄み渡った空の如く一切の曇りなき心でその時が告げられるのを待つ。「日本男子、健ヤカニシテ爽快ナリ」まさにそんな心境に到達した。

二十六日、小学校を訪れた。校庭に足を踏み入れるとまたしても懐かしい思い出が走馬灯の如く脳裏に蘇る。一年生の時の担任は井上先生、金縁眼鏡をかけ兵児帯姿、隣の山崎町から十二キロの道程を自転車通勤、朝早くからまだ手先の不器用な子供たちの鉛筆を肥後守の小刀で削って下さる優しい方であった事。

二年生の時の担任は安東先生、岡山県津山市出身、近所の家に下宿されていて、部屋に訪ねて行っては勉強を教えていただいたり様々なお話を伺った事。

三・四年生の時の担任は田中先生、二本杉の四股名がつくほど相撲が強く、秋祭りの相撲大会に出場された時はクラス皆で応援に出かけた事。

五・六年生の時の担任は井関先生、色黒で細身、誠に教育熱心な方で毎日放課後、旧制中学校受験する児童に補習授業をして下さった上におやつにと御菓子まで頂戴した事。

冬場、雪が三・四十糎降り積もった朝、ネルの布を三角に折りたたみ頭からかぶり登校、教室に入ると木製の柵に囲まれた薪ストーブに火が入れてあり、その柵に風呂敷に包まれた辨当箱をくくりつけ保温するのだが、ストーブの火力が強いと風呂敷が焦げたり、中に入っていた漬物の匂いが教室に充満した事。ストーブ当番が回ってくると山に杉の枯枝を拾いに行った事。　机に小刀の肥後守で彫った落書き等、次から次へと思い出が浮かんでは消え尽きることがない。

去り難い気持ちを抱え佇んでいると来校に気づかれた先生が頭を下げて挨拶をして下さった。こちらは予期せぬ先生の出現に驚き思わず敬礼してしまった。先生に転勤前の休暇で帰省、出発前に今一度思い出の詰まった母校を訪れた事を伝

えると職員室に招じ入れて下さり、お茶を頂きながら四方山話に花が咲いた。「生徒達には予科練を終えた当校の卒業生が来校された旨伝えておきます。御国の為に頑張って下さい」とここでも激励の言葉を頂戴した。村の東市場青年団が母校の校庭の周りに植えた百本の桜の木に別れを告げ帰途に就く道すがら、またも子供の頃の楽しい思い出が堰を切ったように溢れ出す。これも齢僅か十七歳で自らの意志をもって約束された「死」を決定したからか。

近くを流れる揖保川で唇が紫色に変色するまで泳ぎ、川から上がり暫し石の上で甲羅干し、震える体で嗅いだ川の匂い、炒った空豆を袋に入れそれを付けたまま泳いでふやけてしまったけれどそれを友達と分け合って食べた時の食感、紫色に熟した桑の実の美味しさ、足長蜂の巣を見つけると長い竹の竿で恐る恐る叩き落とし、蜂の子を捕まえそれを餌にして雑魚釣りした事、ミミズを捕まえて釣り糸の先の釣鉤につけそれを杭にくくりつけ仕掛けは完成、夕方その仕掛けを魚の居そうな川の両岸の石垣の穴に押し込み翌朝引き上げに行った事、竹の籠の底にミミズを入れその上に草を押し込み、夕方、その籠をウナギの居そうな川底に仕掛け水で流れてしまわないよう重石をして翌朝引き上げに出かけたウナギ捕り、そのウナギを自分で捌いて家族皆で食べた蒲焼の夕餉。楽しかった夏の出来事が次々と思い出される。

両親、家族に特攻に志願、選抜された事を語らず、感じさせず過ごした休暇であったがあっという間に帰隊前日の午後となった。両親のあれやこれやの問いかけにも語る言葉、語れる言葉を選んだ。私からの問いかけにも両親も同様であったであろう。心中では枯れること無き涙を流してはいるもののお互いに心配をかけさせまいと言う暗黙の了解であった。　齢十七歳、これから親孝行の始まりという時期に戦地へ赴く。国難に立った御国を守る為に一命を賭する事が今出来る唯一の親孝行。と思いつも両親の我が子に対する思いは如何ばかりかと自然と心はそこに行き着く。

休暇初日の夕餉の膳にのぼった鯉は予科練入隊のお祝いにと近所の人から頂戴し、それを家の池に放し、毎日、母が見守り育てたものであった。我が子に対する断ち切れぬ思いを心に抱えるも、『家族の事は心配せず、お国の為に一命を捧げて戦い武勲を立てよ。』と激励の意を込めたものと気持ちを奮い立たせた。

出発当日の朝、家族の集合写真を撮った。一切の憂いから解き放たれ揺るがぬ決意のした自分、慈愛溢れる母、今生の別れを決した父、兄を誇りに思う弟、それぞれの心がその写真に焼き付けられ、今も猶その息遣いが聞こえてくる。　その後出発の見送りに集まった人達一人一人に敬礼をし、故郷の山河に『有難う。国の礎となって一命にかえて護るから』と心の中で誓い別れを告げた。

戦後の事になるが福田先任分隊長(当時の階級名)から「誰からもこの休暇を如何に過ごしたか語ってくれた者がいない。上山君はどう過ごしたか教えてくれないか」と問い合わせがあり、この間の行動、両親、家族との団欒の様子を手紙に認め送ったところ大変喜ばれ、感激したとのお礼の手紙を頂いた(巻末附録参照)。

七、潜水学校・特攻訓練　(一九四五年 六月)

帰隊すると、すでに帰っていた隊員が居て休暇中の出来事に花を咲かせた。楽しい話題を語り、耳を傾けていると休暇気分から醒め戦への闘争心が沸き起こり、次の自分の任務に対する気力が溢れ出した。巡検ラッパを聞きつつ名誉ある特攻隊員として選抜された感激に心躍らせ眠りについた。

西空出発の朝が来た。総員起しに続き朝礼、『いざ出陣』そんな気迫が皆から迸り出ている。午前中は兵舎の大掃除。掃き清め、磨きあげる腕にも自然と力が入る。その後、予科練課程卒業の記念撮影となった。逞しく頼もしい戦友の姿がそこにあった。

午後は身の回りの整理をした。「衣嚢ハ、トラックデ出発駅迄運ブ。分隊互ニ指

家族写真(予科練特別休暇)

定ノ場所ニ持チ込メ。カカレ！」の号令で運んだ。残った持ち物は予科練に入隊する際父から贈られた日本刀のみとなった。　「退隊者練兵場集合、総員見送リノ位置ニツケ！」の放送があり、練兵場に集合した。そして、司令の訓示が始まった。

「諸君ハ本日迄ヨク猛訓練ニ耐エタ。海軍軍人トシテ西空デ鍛エ上ゲタ予科練魂ヲ発揮シ起死回生ノ勝利為、国難ニ殉ジ一命ヲ天皇陛下ニ捧ゲ戦イ君恩ニ報イル事ヲ願ウ。」との趣旨のものであった。

その後、在隊者全員が隊門まで両側に整列し海軍の『帽振レ』の号令で見送られる中、十一分隊を先頭に日本刀片手に敬礼し隊門を目指し行進、見送りの列の中に厳しく訓練、教育、指導して下さった教員達の顔が見えた。どの顔も今にも涙が溢れんばかりであった。「頑張れ、頼むぞ！」と張り裂けんばかりの声で激励し見送って下さった。

隊門をくぐり、思い出の七曲りを通り阪急甲東園駅を出発、省線（ＪＲ）西宮駅へ向かい到着。興奮冷めやらぬ中、各自の衣装を受け取り軍用列車に乗り込んだ。乗り込んだものの行き先は知らされていない。発車し車窓に見える景色で西に向かって進んでいるのを知った。　ところがどこでどう知ったのか戦友の家族が途中の網干駅に見送りに来、差し入れをしてくれた。その戦友は再度「帽振レ」で別れを惜しむ機会を得た。　車中で夜を迎え、機関車の発する蒸気音に耳を傾け、軌道を走る列車の揺れに身を任せていると知らぬ間に深い眠りに落ちた。眠りから覚めると空は白み始め広島駅に停車した。

戦友と西に向かうならば任地は山口県か九州のどこかであろうと話したが間もなく発車。宮島、岩国駅を通過し、柳井駅で停車した。そこで「総員下車」の号令がかかり下車し、荷物を待ち受けていたトラックに積み込んだがまだ行き先が不明。分隊毎に整列して行進を始めた。５ｋｍ程行進したところで、前方から行進してきた隊列に出くわした。その隊列から「貴様等、潜校に行くのか。大変な所に来たな」と声がかけられた。こちらが返事を返せずにいると「頑張れよ」と励まされ、おぼろげながら任地がこの地にあることを知った。　そして訓練地『海軍潜水学校柳井分校』に到着した。その日の午後、潜水学校校長西野耕三中佐より訓示があり、「第二特攻戦隊附ヲ命ズ」「潜水学校附ヲ命ズ」「特攻兵器取扱講習員ヲ命ズ」と命を受け、「海軍二等飛行兵曹ニ任ズ」と思ってもいなかった下士官に任官した。やっと正式に念願の特攻隊員の一員となった。その後、学校の説明、心得を教わり、身の回り品の整理を行った。

翌朝、朝礼が始まった。整列した面々は学徒動員出身者と我々予科練出身者からなる特攻隊員ばかり、さすがに死を恐れぬ面構えの猛者揃いであった。　潜水学校の校長は魚雷調整にかけては日本においては右に出るものが居ないほどの腕前の方であった。副校長は潜水艦の艦長経験豊富な方で、轟沈（敵艦に魚雷を命

中後、一分以内に沈没。）賞を3ヶ持ち、また、潜水艦の艦長としてアメリカの西海岸に向け出撃し通商破壊作戦を行った際、敵から爆雷攻撃を受けたがその時の不発弾を自分の潜水艦に懸けたまま太平洋を横断し日本に持ち帰り無事帰還した度胸のある人物であった。そして、上官には海軍兵学校出身者で二十三歳の若さで大尉に任じられるほどの優秀な方もおられた。戦況厳しい折にも関わらず、まだまだ人材豊富な海軍であった。

六月一日任海軍二等飛行兵曹に任官して、憧れの七つ釦の軍服から下士官服を着ることとなった。特攻隊員となったからにはその下士官服も長く着用しないという判断からか先輩の着ていた詰襟の下士官服が支給され、下士官を表す黒線一本が入った略帽と抱き茗荷二等飛行兵曹の階級章が附いた。

予科練では飛行兵として空を飛ぶ教育、訓練であったが、これより八月末までの三ヶ月間は空から海中への教育、訓練と百八十度転換した。　ここで魚雷電機航海襲撃通信等々の基礎教育を受けた後、特攻基地への配属となる。日課表に従い艦隊勤務同様、月月火水木金金と休みなしの教育、訓練であった。また、西空とは違い潜水学校では兵員（兵隊）はほとんど見当たらず下士官以上の特攻隊員ばかりであった。

潜水学校を囲う板塀の先には人間魚雷『回天』（魚雷前部に一・五屯爆装し海中を走行し敵に体当たりする一死千殺特攻兵器）の訓練地である平生基地があり、そこでは特攻兵器『回天』の体当たり突入訓練が昼夜分かたず行われ、その回天を追尾し訓練事故の際救出の任にあたる震洋（ベニア板で艤装、自動車エンジンを動力とし海上を走行）による救助訓練も連日連夜行われていた。

また、平生基地は潜水艦の停泊地でもあり、沖には出撃の後、任務を終え無事帰港した潜水艦が停泊。そして、回天を搭載し再び出撃して行った。　米国海軍の重巡インディアナポリスがサンフランシスコにて広島、長崎に投下した原子爆弾二発の部品を積載、出港しマリアナ諸島に急行、到着。積荷を降ろし無事任務終了しグァムからレイテ湾に向かう途上の昭和二〇年七月二九日、この平生基地より出撃したイ五八潜水艦の魚雷攻撃により撃沈された。将に広島、長崎への原爆投下に対する仇打ちとなるものであった。　このイ五八潜水艦（イ印は排水量千屯以上の大型潜水艦）の交通塔には菊水の流れ紋が白く描き込まれ、その下に日の丸と艦を表すイ五八が表記されていた。そして、出航時には南無八幡大菩薩と非理法権天の二流の幡がたてられていた。

人間魚雷一死千殺特攻兵器回天は潜水艦の甲板上の架台に設置されていた。その搭載数量は潜水艦の大きさにより異なる。小型艦では、四基搭載（前後甲板に二基ずつ）、中型艦では五基搭載（前甲板に二基、後甲板に三基）、大型艦では六基搭載（前甲板に二基、後甲板に四基）され、それぞれ固定バンドで固縛される。回天への乗艇は、交通筒の有無により異なる。交通筒が有る場合は、潜水艦内部

の下部ハッチを開けて乗艇、無い場合は浮上して甲板に降り上部ハッチを開け乗艇する。又、航行中の敵艦襲撃には下部ハッチから乗艇する。乗艇後、上下ハッチの蓋は鋼鉄製でかなりの重量が有り下部ハッチの蓋は自分で閉鎖出来るが、上部ハッチは甲板上の整備員に手伝ってもらい閉鎖し、蓋に付いたハンドルを自分で回し締め切る。その後、整備員が外部から専用ボックス金具で回し増し締めを行い乗艇完了となる。

十七歳で国を護る為、命を捧げて敵艦に体当たりする特攻隊員のこれを今生の別れと言う表情、態度に接し、最期の言葉を交わし生きたまま鉄の棺に納棺するが如くハッチを閉める作業をする整備員の心中も如何ばかりであったか。込み上げる涙を抑えきれず、只、本懐成就、見事命中してくれと祈るばかりだったと聞く。

飛行機なれば発艦後、エンジン不良等発生すれば不時着なり引き返す事も可能であるが、回天の場合、乗艇後各種点検を行い、異常が見つからなければ発進、引き返す事が出来ない。艇に乗り込み内側からハッチを締め切った後、二十四項目にのぼる装置機関の点検確認を自分で行い、異常が無ければ潜水艦と繋がれた電話でその旨を報告、その後、艦長より電話にて「発進用意。」の命令が下り、『発進用意。』と復唱、電動従舵機を始動の後、十八項目の作業をし『用意ヨシ。』と艦長に報告する。艦長からの「言イ残ス事ハ無イカ。」の問いかけに『大変オ世話ニナリ有難ウゴザイマシタ。』『行キマス。』と今生最期の言葉を残す。「成功ヲ祈ル。」との艦長の言葉を聞いた後、回天搭乗員は渾身の力を込め発動桿を前に押し発進する。途中、目標艦を確認するため海中から静かに浮上、特眼鏡にて目標艦の位置、方位角、照準角、距離を測定、進路を決定し全速三〇ノットで目標艦目がけ発進、それと同時に自爆装置である手動スイッチに手をかけ敵艦へと向かう。艦に命中の衝撃で体が前のめりになり爆発スイッチが自然に入るよう最期の姿勢をとった。

特攻兵器「回天」における搭乗戦没者は計一〇六名にのぼる。平均年齢二〇・八歳。海兵出身一九名、海軍機関学校出身一二名、水雷学校出身九名、予備学生（学徒）出身二六名、甲種飛行予科練出身四〇名（平均年齢１８・５歳）であった。

回天操縦技術教官であった橋口實大尉は、隊員を教育、送りだすだけでなく幾度も自らが出撃できるよう血書志願。八月二〇日に突撃隊長として念願の出撃の決定が下ったが、直前の八月一五日終戦を迎え、出撃取り止めとなった。終戦の報せを受けた後、橋口大尉は教え子である搭乗員達と近くの草むらに集い今後如何に身を処するかについて話あいを持ったが自身の不動の決意については口にする事は無かった。そして八月一八日、仲間と酒を酌み交わし、酒の匂いが消え、皆が寝静まった、〇三〇〇（午前三時）多くの回天搭乗員を教育し出撃させておきながら、自らは国を護ると言う大任を果たせず生きて終戦を迎えた事に対して

採るべき進退、出すべき結論として大尉自身が乗艇するはずであった平生基地停泊中の回天に乗り込み、真白な二種軍装（夏服）に身を正して拳銃自決を行った。

さて、特攻兵器「回天」に搭乗しての出撃と思っていたが、戦況が本土決戦止む無しとなり大型潜水艦に装備され、外洋での通商破壊、敵艦攻撃に使用される人間魚雷「回天」ではなく、本土沿岸にやってくる敵の上陸船団を攻撃するため開発変更された特攻小型特殊潜航艇「海龍」に搭乗、操縦、特攻に向けての訓練、教育を受ける事となった。

「海龍」は搭乗員二名で操縦、特攻攻撃（二名共が特攻隊員となり戦死する。）を行う。艇の前部に六〇〇キロ爆装しており、その上魚雷二本も装備し三隻の艦船を撃沈する事が可能であった、同じ特攻兵器「回天」と比べ操縦性、操舵性に優れており、より戦果が上げられると期待され終戦までに二〇〇隻以上が建造された。しかし、実戦で使用される事無くその生涯を終えた。

潜水学校日課

〇五〇〇　総員起シ。
〇五一五　朝礼、体操、掃除。
〇六〇〇　朝食、洗面所掃除。
〇七一五　第一課業始メ。
〇七三〇　軍事点検（月曜ノミ）。
〇七四五　第一課業止メ。
〇八〇〇　第二課業始メ。
〇九〇〇　中憩始メ。
〇九一五　中憩終リ。
一〇一〇　中憩始メ。
一〇二〇　中憩終リ
一一二〇　第二課業止メ、体操始メ。
一一三〇　午食
一二三〇　第三課業始メ。
一三三〇　中憩始メ。
一三四〇　中憩止メ。
一四四〇　第三課業止メ、休メ。
一五〇〇　第四課業始メ。
一六〇〇　第四課業止メ、休メ、入浴。
一六四五　夕食。
一七四五　第五課業始メ。
一八四五　中憩始メ。
一九〇〇　中憩止メ。
二〇〇〇　第五課業止メ、甲板掃除。

二〇三〇　総員吊床下セ。
二〇四五　巡検用意。
二一〇〇　巡検、巡検終リ、煙草盆出セ。

潜水学校六月時間割

六月一日	金	午前	入校式	
六月二日	土			
六月三日	日			
六月四日	月	午前	水雷	午後	電機
六月五日	火	午前	電機	午後	短艇
六月六日	水	午前	短艇	午後	水電
六月七日	木	午前	電信	午後	航海
六月八日	金	午前	航海	午後	電機
六月九日	土	午前	航海		
六月一〇日	日	午前	行軍		
六月一一日	月	午前	水雷	午後	短艇
六月一二日	火	午前	航海	午後	内火
六月一三日	水	午前	海龍	午後	通信
六月一四日	木	午前	短艇	午後	航海
六月一五日	金	午前	電機	午後	航海
六月一六日	土	午前	航海	午後	水電
六月一七日	日	午前	カッタ	午後	帆走
六月一八日	月	午前	航海	午後	電機
六月一九日	火	午前	航海	午後	内海
六月二〇日	水	午前	電機	午後	海龍
六月二一日	木	午前	短艇	午後	航海
六月二二日	金	午前	電機	午後	内火
六月二三日	土	午前	海龍		
六月二四日	日	午前	運動	午後	競技
六月二五日	月	午前	海龍	午後	内火
六月二六日	火	午前	通信	午後	航海
六月二七日	水	午前	航海	午後	電機
六月二八日	木	午前	内火	午後	海龍
六月二九日	金	午前	水測	午後	電測
六月三〇日	土	午前	襲撃	午後	総員短艇
七月一日		編成替			

潜水学校では、兵器の知識を得るための教本の表紙は赤系統の色であった。ピンクはマル秘、色が濃くなるに従い極秘、厳秘と表紙の色が変わる。日直が防空壕に行き、厳重に保管された書庫から分隊氏名、必要冊数記入後、教本を借り出し、授業終了後返却する。教本に従い授業を受けるのだがノート、筆記用具は一切持ち込み禁止となっていた。とにかく教官からの授業を聞いて記憶するほかない。当然、後で習った所の試験があるので授業終了後、隊員同士理解できなかった箇所や記憶できなかった所を教え合った。

海龍操縦席

日増しに空襲も激しくなり、昼夜の隔てなく防空壕建設の突貫工事が続けられていた。それと並行して、自分達で隊外にある山の松林の中に三角バラック兵舎を建設した。夕食とバス（風呂）が終わると入湯上陸と称し松林のバラック兵舎に向かい、床板に毛布を敷き、足元を電球の薄明かりで照らし西空当時の内緒話を披露したり、西空に残った者が如何に毎日を過ごしているか、故郷の思い出、食べ物の話題に花を咲かせた。就寝後の巡検、吊床下しも無い、自然と日々の緊張感から解放されて就寝したが、就寝後蚊の大群に襲撃されてぐっすり眠れない。後になって蚊帳が支給されたが、バラック小屋故、床の隙間から侵入してきた。これも毎日の厳しい訓練の疲れと、日々の蚊の襲撃に慣れっこになってしまった事でぐっすり眠れるようになった。　兵舎から松林のバラック小屋に向かう途中出会う近隣の方々は、我々が特攻隊員である事を承知されておりトマト、枇杷、西瓜などの差し入れを頂戴したのも懐かしい思い出となっている。　そんな中、米軍爆撃機による海軍徳山燃料タンク、光工兵廠への空襲が有り、本土決戦近しと肌で感じる様になった。

そして八月六日、課業始メを行った〇八一五頃、ドドドと地震の様な振動があったかと思うと、兵舎の東北の方角の山の向こうから積乱雲の形をした黒い雲が湧き出し大きくなって行くのが見えた。呉軍港に米軍機による爆撃があり弾薬庫が爆発したのではと思ったが、隊員達は只、顔を見合わせるばかりであった。暫くして広島に新型爆弾が投下された事を知った。校内の掲示板に「高性能爆弾が広島に投下された。暑くとも肌を露出するべからず」との告知が張り出された。

潜水学校での三ヶ月にわたる教程も終わりに近づこうとしていたが、何処の基地に配属されるか全く不明であった。にもかかわらず隊員皆の心は命ぜられた配属基地に赴き自分に課せられた重責を果たすという微塵も揺るがぬ固い信念、その一点に集中していた。最高の死に場所において国に命を捧げ、見事、花を咲かせ散る。必ず敵艦への体当たりに成功し敵を震撼させ、犬死と呼ばれる様な最期を遂げない。心の炎は鎮まることなく只管燃え盛っている。それは誰の面構えからも見て取れた。

西空では全く聞く事が無かった放送が潜校にはあった。「巡検終リ、煙草盆出セ。」がそれであった。その放送が済むと兵員、兵舎の人達が中庭に出て涼を取りながら、家族や故郷の話題を口にし、寛いで話しこんでいる光景が見受けられた。生きてこの世に存在している間においては、今存在する現世を存分に生き、楽しみ、味わい尽くすそんな心持であったと言うべきか。　夏の暮れなずむ夕べ、空も雲も茜色に染まる。そんな光景を見ると両親の面影、故郷、想い出が浮かんでは消えて行く。そんな気持ちを抱えたまま海辺に佇んでいると子供の頃歌った童謡の数々、「赤とんぼ」「春の小川」「夕焼け小焼け」「故郷の空」「里の秋」を自分の意思を持つ事無しに口ずさんでしまう。
一点に定まった心の琴線にふれ、メロディーを奏でる。凪が止んだが如く心の揺れは起きない。感慨と言う言葉が心情を表す。不思議と切なさは感じなかった。『誰か故郷を想わざる』も口ずさんだ。

花摘む野辺に　日は落ちて
みんなで肩を組みながら
唄をうたった　帰りみち
幼馴染の　あの友この友
あああ　誰か故郷を想わざる

人間には故郷に対する断ち切れぬ深い愛着の念が有り、その想いが強く大きくなって愛国心へと育ち、一命を捧げても国を護ると言う信念に到達するのだと思う。花に喩えると家族を護ると言うのは蕾であり、その蕾が見事大輪の花を咲かせたのが国を護る愛国心であるとも言えるのではないか。

米寿を迎える齢に達して後、思念に導かれるまま此の散文を書き進めて来た。

書斎の窓辺に座り当時の記憶を手繰り寄せ、蘇らせ、文章として残す。その作業を進めていると歌の数々、童謡、流行歌、軍歌、時にはクラシック音楽が曲を奏で、その歌詞の一つ一つが私の心情のひだの一つ一つを震わせあの頃へと誘って行く。止めようとしても止まらない、余りにも心地よいメロディーと詩は次から次へ余韻を残しつつ一つ目の山、二つ目の山へと連なって行く。当時の自分のアルバムが映し出される。それは決して幻影ではない、真実が歌の中にあると言う打ち消しようもない事実に気付き、笑み頷く。　ここにそれらの歌の歌詞を書き綴る事をお許しいただきたい。

『懐洋賦』

一、沖の白帆の揺ぐを見れば　男心は湧きに沸く
国の護りの太平洋に　やがて沈めん此の命

二、狂う怒濤の響きを聞けば　夜も眠れぬこの心
西の窓辺に差し込む月を　じっと見つめた目は潤む

三、月に泣けども花にも舞えど　夫も男のまこと故
太平洋も抜手を切って　剣振るわん敵の国

四、一度死んだら二度とは死なぬ　たった一つのこの命
どうせ死ぬなら敵戦艦に　魚雷諸共体当たり

五、泣いて呉れるな出て行く俺は　君に捧げたこの命
生きて帰らぬ誓いも堅く　遠く見つめる不二の山

『潜校歌』

一、敵艦行き交ふ前線へ　征きたい念ひを抱きしめて
潜校に学ぶ若人吾等　青い海見りゃ気も躍る

二、敵轟沈を夢に見て　ガバとはね起きゃ窓越しに
夜半に輝く千古の月に　重い責務が身に沁みる

三、学ぶ机に耳当てりゃ　先に巣立ちたる戦友の
声が聞こえる太平洋　今に見てゐろ吾等も征く

四、大和魂鍛へあげ　百濤を一仭に断ちぬべし
萬里の怒濤の最前線　征くぞ男児の晴れの日ぞ

五、　空母も戦艦も皆屠り　凱歌に輝く洋上に
祖国を拝む吾等の胸に　鳴るぞ亜細亜の明けの鐘

『海龍隊歌』（皇国守らんと）

一、　昇る朝日に照り映えて　鏡の如き瀬戸内の
清き水をば心して　名も勇ましき特攻の
誠と一つの技を練る　吾等は海龍特攻隊

二、　南に北に散り行きし　後に続きて今征かん
決然立てり若桜　吾等は海龍特攻隊

三、　水漬く屍と潔く　五ヶ条教え畏みて
特攻魂一筋に　海の御楯と今散らん
吾等は海龍特攻隊

『西宮海軍航空隊　隊歌』

作詞　海軍教授　渡辺弘一郎
曲は三重空と同じ

一、　武庫の海原朝明けて　翠巒遠く六甲の
雲吹き霽るる上ヶ原　雄飛の誓いや堅く
空の御楯と勢いたつ　我等は空の少年兵

二、　来たれ国難何ものぞ　只聖訓を畏みて
夜を日に兼ねる訓練の　夢にも握る操縦桿
明日の戦を負いて立つ　我等は空の少年兵

三、　夕べ安けき熟睡にも　瞼に浮ぶ母の面
又会う期は靖国の　光麗らな春四月
散るを惜しまぬ若桜　我等は空の少年兵

四、　歴史は薫る三千年　金甌の栄え永久に
護りはつべし大八州　御稜威冷き八紘に
無敵の翼さし伸べむ　我等は空の少年兵

五、　濤にはためく軍艦旗　光芒燦とさす処
昨北海に羽搏けば　今日南溟に撃滅の
見よや不屈の闘魂を　我等は空の少年兵

『同期の桜』

一、貴様と俺とは同期の桜　同じ航空隊の庭に咲く
咲いた花なら散るのは覚悟　みごと散りましょ国のため

二、貴様と俺とは　同期の桜　同じ航空隊の　庭に咲く
血肉分けたる　仲ではないか　なぜか気が会うて　別れられぬ

三、貴様と俺とは　同期の桜　同じ航空隊の　庭に咲く
仰いだ夕焼け　南の空に　未だ還らぬ　一番機

四、貴様と俺とは　同期の桜　同じ航空隊の　庭に咲く
あれほど誓った　その日も待たず　なぜに死んだか　散ったのか

五、貴様と俺とは　同期の桜　離れ離れに　散ろうとも
花の都の　靖国神社　春の梢に　咲いて会おう

『若鷲の歌』

一、若い血潮の　予科練の　七つボタンは　桜に錨
今日も飛ぶ飛ぶ　霞ヶ浦にゃ　でかい希望の　雲が湧く

二、燃える元気な　予科練の　腕はくろがね　心は火玉
さっと巣立てば　荒海越えて　行くぞ敵陣　なぐり込み

三、仰ぐ先輩　予科練の　手柄聞くたび　血潮が疼く
ぐんと練れ練れ　攻撃精神　大和魂にゃ　敵はない

四、生命惜しまぬ　予科練の　意気の翼は　勝利の翼
見事轟沈した　敵艦を　母へ写真で　送りたい

これらの歌は、『己の死は国を護る為に選んだ大義の結果である。』という揺るがぬ信念を持った誇り高き戦人、特攻隊員の心を奮い立たせた。不撓不屈の精神を涵養し、米寿を迎えた今となってもその心は生き続けている。

戦後歩んだ人生において、山あり谷あり、上り坂下り坂あり、まっすぐな道、道なき道あり、空を仰いで高笑いする事、砂を噛むが如き逆境あり、人に語りた

き物語、語れぬ物語あり。そこに身を置いた時、自分のとった進路、行動、振舞い、語った言葉、それらは総てその歌を歌った時代に培われ大きな力を与えてくれた。

八、八月十五日　（一九四五年）

一〇.〇〇頃、零戦が低空旋回を始めたかと思うとエンジンの不調音を耳にした。何か不吉な事が起こるかも知れないとの予感が走った。零戦は上関方面より飛来し潜校近くの海岸に不時着した。その時丁度休憩中で有った為、搭乗員救出に向かった。無事救出したものの意識不明の状態であった。すぐさま軍医と衛生兵により手当が始まり、我々は潜校に戻った。

「一二.〇〇重大発表ガ有ル。練兵場ニ総員集合。」との放送があり練兵場に整列した。

檀上にラジオが設置されており拡声器で放送されるよう準備されていた。海上には回天積載の為停泊している潜水艦の姿も見え何時もと変わらぬ風景であった。そして、一二.〇〇.ラジオから「天皇陛下の玉音を賜る」と言う言葉が雑音混じりの中聞きとれた。「総員一丸トナリ勝利ノ為戦エ」との御下命があるものと一心に耳を傾けるのだが雑音で放送が聞きとり難い。途切れ途切れ雑音混じりの放送ではあったが聴き進む内、おぼろげながら終戦の詔勅であると推察した。

放送終了後、副校長より「正確な情報は入っていない。軽率な考えを持って早まった行動を起こさぬよう厳重に申し渡す。新しい情報が入り次第告知するから待機せよ」との訓示があった。　練兵場に集合、整列した隊員皆、茫然自失、立ちつくす他なかった。

波の音、蝉の声、夏の景色、時が止まった。

何とかデッキに帰り着いたが思考する気力が全く起らない。今まで味わった事のない脱力感で身動きが取れない。特攻隊員として鍛え上げた肉体から愛国の精神で昇華し磨き上げた珠の如き魂が離脱してしまった。心と体が存在しない只の『物体』になってしまった自分の姿がそこにあった。声を失った。　どこからか嗚咽の声が聞こえた。それが自分の声だと思えなかった。固く握りしめた拳が濡れていた。自分の流した涙と気が付くのに暫しの時を要した。悔しさが込み上げてきた。それが溢れ出し滂沱の涙となった。「エイ！」「クソ！」の声が聞こえた。自分の声であった。その声は次第次第に大きくなり叫びとなった。濡れた拳で膝を叩いた。叩いても叩いても飽きる事が無かった。夢中になって叩き叫び続けた。涙も声も枯れ果てた。それでも張り裂けた魂から血は流れ続けた。

『戦は終わった』予科練に入隊し、今日まで血の出る様な猛訓練に耐えた。一命を顧みる事無く特攻隊に志願し、選抜されて潜水学校に配属された。特攻潜航艇「海龍」に搭乗し見事敵艦に体当たりし国を護る礎となり死ぬ。その寸前で終戦となった。「命が助かった」とは思わなかった。只悔しかった。「生きる目的が死ぬ事」と決意した十七歳の純真無垢な少年には残酷すぎる不変の現実を受け入れる結果となった。

断片的な情報が入り始めた。激しく揺れ動く心のうねりが緩やかなものに変化した。しかし現実を受け入れ納得するには相当な時間を要した。　青天の霹靂が如き「終戦」を迎えた。明日は今日の連続ではない。何が現実となるのか全く分からない。変幻自在な時間の経過にあっては自分の力でコントロール出来る事など限られている。目的の無い時間が流れ、それに身を委ねただただ流される毎日となった。

そして八月二三日、以下の放送があった。

「御聖断ニヨリ我々大日本帝国ハ無条件降状ヲ受ケ入レル事トナッタ。シカシ、事態ハ何時ドノ様ニ変化スルカ全ク不明デアル。総員、故郷ニ復員シ待機セヨ。但シ、何時如何ナル命令ガ下ルカ分カラナイ。体ニハ特ニ気ヲ付ケル様ニ」

「若シ此ノママ戦ガ終ワル事トナレバ、新シイ日本建設ヲセネバナラナイ。君達ガ先頭ニ立チ今迄培ッタ精神ヲ以ッテ当レバ可能デアル。君達ノ活躍ヲ期待シテ止マナイ」

「今夕、各分隊ゴトデ別レノ会ヲ開ク。無礼講デアル。名残無キ様別レヲ惜シメ。酒ノ用意モ充分シテアル。悔シサヲアライナガシテ呉レ」

「今迄ヨク頑張ッタ」

「帰郷スルニ当タリ給与ノ清算ガ出来テイナイ。仮渡シトシ後日清算ガ完了次第送金スル」

「現在自分ノ所有スル持チ物ハ総テ持チ帰ッテヨシ。帰郷迄ノ食料ハ明朝支給スル。」

「一七.〇〇ヨリデッキニテ分隊ゴトノワカレ会ヲ開ク。準備カカレ」

早速、会場の設営に取りかかり完了。会は始まった。一命をかけ一身同体と誓い合った同期の桜が一堂に会し「別れの会」を開く事になるとは誰一人想像だにしていなかった。その上、無礼講の会と聞かされた。皆どんな話題を以って話すのか、話してよいか、語りかけられた話題にどう答えるか、どう振る舞うか、当惑するばかり。静かなものであった。そして本当に一七才歳の隊員に迄、酒、ビールが出された。飲み慣れない酒で酔いが回り、知らず知らずの内に声は大きくなった。何処のデッキからも大きな歌声が聞こえてくる。予科練で鍛え上げた負けじ魂がメラメラと沸き起こり隊員皆が他の分隊より大きな歌声を出し座を盛り上げる。その車座の中に分隊長が加わり更にヒートアップ、座はお祭り騒ぎとなった。誰もが腹に溜まった悔しさを発散した。会の始まりでは予想も出来ない、将に見事と言うべき盛大な別れの会となった。そして二一.〇〇終了。海軍生活最

期の夜を吊床の中で迎えた。熱気冷めやらぬ夜であった。

二四日、起床ラッパで同期の桜との別れの朝を迎えた。朝食を済ませ、支給品、身の回り品を衣嚢に納め柳井駅迄向かうトラックに積み込んだ。その後、潜水学校校長より帰郷証明書、軍歴表、仮清算金を受領した。軍歴表には『海軍一等飛行兵曹ニ任ズ』の文字があった。進級していた。　後日の事ではあるが、平生回天記念館にその時受領した帰郷証明書、給与の清算残金が振り込まれた山口銀行の定期預金証（ＧＨＱの命令で預金封鎖となったもの）と柳井潜水学校での日課表のメモを寄贈した。

海龍魂

制空制海在米軍
会敵激闘友不還
特攻精神君知否
青史永伝海龍魂

九、帰郷　（一九四五年　八月）

想い出の詰まった潜校の隊門を帽振れで後にした。何度も何度も後を振り返った。八月の炎天下、出征の際、父から贈られた日本刀片手に柳井駅へと歩いて行った。玉の様な汗が噴き出すが「生きて帰郷する」と言う実感は全く湧いて来なかった。駅に向かう途中、民家に立ち寄り冷たい井戸水をご馳走になった。その水の美味しさと「兵隊さん、御苦労様でした」とかけて頂いた言葉は今も忘れられない。　柳井駅に到着したが、列車は時刻表通りに来ない。やっと来たかと思えばすでに満員であった。そこに無理やり体を押し込み乗車した。各駅停車でやっと広島駅に到着した。信じ難い現実がそこにあった。一面の焦土、昔の面影が何処にも見あたらない寂寥とした景色、風景が広がっていた。

あの日広島に投下されたのは只一発の爆弾に過ぎない。その一発がこの地上から民間人二〇万余りの生命を奪った。遺体さえ残らず遺灰さえない、蒸発したとしか表現できない人々がいた。阿鼻叫喚の修羅場をも越えた地獄の痕を目にし、言葉を失った。戦闘員の訓練を受け、戦地に赴く。回天による特攻攻撃で敵空母戦艦を轟沈したとしても、戦人が戦人の命を奪う通常の戦闘行為に他ならない。奪った尊い命は戦闘員ばかり三千人である。広島に為された米軍の無差別攻撃対して腹立ち、怒りが湧き出て来たが長くは続かなかった。余りの光景に理性が急激に戻る「揺り戻し」とも呼ぶべき作用が働いた。人間が人間たる正常な判断を

失った「狂気」とも呼ぶべき行為を選択、実行。その帰結がこの無差別攻撃に及ぶ戦争となった。「悲惨」、「残酷」の言葉を越えた場所が此の広島の地であった。車窓から見える景色には言葉では伝えきれない体験したものでないと分からないものがあった。　再び同期の桜、戦友の赤刎正夫君の詠んだ歌をここに書き記す。しみじみと身に沁みる歌である。

燃ゆるもの　尚内にあり　国難に
たたかひし事　深く肯なふ

満員の復員兵を乗せた列車は再び東へと向かい始めた。日も西に傾き復員兵の戦の疲れが移ったが如く喘ぎ喘ぎ走っている様感じられ、不安定に揺れる列車の動きに只身を任せた。明日生きて再び両親に会える事など一切頭に思い浮かびもしなかった。　深夜、姫路駅に到着した。一番ホーム姫新線乗り場の外灯の下で暫し休んでいると、こちらの姿に気付いた駅員さんが私の傍らに来て「何処にお帰りですか。」と尋ねて下さった。帰郷先を伝えると時刻表で姫新線の一番列車の発車時刻と新宮駅で下車その後、復員兵の人数がある程度纏まれば日通と一台トラックを貸し切る交渉をして山崎まで戻ってはどうかと帰郷の方法まで教えて頂いた。

空襲で駅のホームに屋根は無くなり、立っている外灯の下を除けば漆黒の闇夜、満天の星の下、支給された毛布に身をくるみ日本刀を抱いて仮寝した。夜が白み始め冷え込みを感じ目覚めた。抱いて眠った日本刀はあったが身をくるんでいた毛布が消えていた。起き上がり周囲を見渡すと始発列車を待つ四、五人の復員兵を見つけた。全く見ず知らずの人達であったが傍に行った。同じ軍人であった体験者同志、互いの軍歴、戦歴等を話すうちにすっかり打ち解け話し込んでしまいあっという間に一番列車の発車時刻となったが、そこで初めて外がすっかり明るくなっているのに気付いた。ここも広島と同じく駅舎の外は一面の焼け野原。広島は焼け残ったドームがあったが、ここには姫路城だけが残っていた。焦土に他ならない。一番列車に乗り込み播磨新宮駅で下車し、待合所のベンチに座り込んだ。時間が経つにつれ人も増え、姫路駅の駅員さんが教えてくれた手順を実行、但し、山崎行きのトラックの貸し切り交渉は年上の人に任せ交渉成立。割り勘となり山崎迄帰った。山崎に嫁いだ姉の家に寄り、無事復員した姿を見せその後、バスに乗り込み帰郷した。　前回の帰省は、両親に特攻に志願し、選抜された事を秘匿し過ごさねばならぬ誠に重苦しいものであったが、此の度は、これまでの出来事を含め一切隠し事なく語り、安堵させられる喜びに満ち溢れたものであった。

そして、生きて再びこの世で会うこともあるまいと覚悟し息子を送りだした両親が、私の無事な姿を見るなり、一声も発する事無く、ただただ呆然と立ち竦んでいた、その姿が今も昨日の出来事の様に思いだされる。その夜、連日の疲れ、

睡眠不足と無事帰省した安堵が重なったせいか、前後不覚とも言うべき深い眠りとなった。翌日の午後になってやっと目が覚めた。目は覚めたものの、何かをやろうと言う気力が全く起きない。とりあえず持ち帰った物品を引き出し整理を始めたが出て来る物は潜校での想い出の詰まった品々。同期の桜の顔が思い浮かぶ。何時予備役編入の召集が有るか分からないのでその覚悟だけはしておこうと思うが、終戦を迎えた今、「生きる目的が国の為に死ぬ事」であった人間には、「今後如何に生きるか。」と言った目的、目標が全くないし、そういった事に気付く事も無い、持とうと言う気力もないし、起こらない。空に浮んだ雲の如く実体はあるが意志がない。生きて再び両親と家族、知り合いに会え、あれほど思いを馳せた故郷に戻りえたにも関わらず、毎日が空しさの連続で何も手につかない。やっと外に出る気になり散歩に出かけた。変らぬ故郷の風景が広がっているが何の感慨も湧いてこない。目にも入ってこない。

道端で歓声を上げ夢中になって遊んでいる子供の姿に気付いた。終戦になった事を気にもせず、過去未来について拘りを何一つ持たず笑い声を上げ遊びに興じるその純真無垢さに引き寄せられ思わず近寄り声をかけた。子供達は私の顔を見るなり一目散に蜘蛛の子を散らす様に逃げ出した。もう一度声をかけたがこわばった顔つきのまま立ち止りもせず振り向きもせず何処かに行ってしまった。暫し逃げ出した理由を考えたが答えが見つからなかった。　家に帰り両親にその出来事について話をすると「孝の目つきがきついので子供達が怖くなったのだろう。」との答えが返ってき得心した。不撓不屈の信念を以って日々の生活を送る鬼と化した戦人である特攻隊員と言葉は悪いが極楽の娑婆で過ごす人々との間の隔たりが眼光に現れたものと教えられた。

十、　私の運命（さだめ）

戦は終わった。戦の有った過去の生活には戻れない。決別の後の出発ではない。生まれ変わる。いや、天から新しく命を頂戴したのだ。過去は過去と忘れ去るのではない。此の度の大戦で途方もない数の人命が失われた。それは戦場で、見知らぬ場所で、市街地で。人に看取られ葬られ、はたまた人知れず葬られる事すら無く。

『海行かば』

海行かば　水漬く　屍
山行かば　草生す　屍
大君の　辺にこそ死なめ
かへりみは　せじ

私は生き残った。五体満足、それ以上だ。海軍で鍛えられ人から戦人と呼ばれるほどに。もちろん精神的にも鍛えられた。死を決して恐れず死を誇りと思うほどに。私は生きる。此の度の戦で亡くなった人の分まで生きる。予科練で鍛え上げられ叩き込まれ、それによって獲得した能力を遺憾なく発揮し、これからの人生を送る。両親と一緒に暮らし、心配などさせない生活をする。そう決意した。特攻潜航艇「海龍」に搭乗し出撃命令が下るその一歩手前で戦が終わり生き残った。自分が望まぬ結末であった。生死を分けた運命とは何なのか。死せる者は今もなお生き残りし者に何を托したかったのか。生き残りし者は死せる者に対し何を報いて生きて行くのか。十七歳の少年が出した答えは次の様なものであった。

運命（さだめ）なのだ。目に見えぬ力、神仏先祖の加護により生かされた。死者から願いを託されたから生き残ったのだと。一面の焼け野原が広がり焦土となった祖国日本。一日でも早く戦前の水準、それ以上の繁栄した新生平和国家日本を建設する事。それが此の度の大戦で亡くなった方々の願いでは有るまいか。託された願いと責務は誠に重い。不可能とは思えないが何年か先に可能とも思えない。しかし托されたのだ。実現するのだ。それが家族を、親族を、一族を、民族をそして国家を護るために亡くなった方々に対する報恩、供養なのだと。

そして、その後、両親の元で懸命に働いた。新宮町牧の旧家から妻「妙子」を娶った。妻はよく両親に仕え、立ち働いて呉れた。一男二女を授かった。日本は奇跡とも言うべき復興を果たし、旧をも遙かに凌ぐ姿で再び国際社会に登場した。両親は鬼籍に入ったが、幸運にも最期を看取る事が出来た。子供達は健やかに成長し、素晴らしい伴侶と出会い結婚し家庭を持った。元気で可愛い孫には「おじいちゃん」と呼ばれた。戦後数十年の時を経て昭和天皇から藍綬褒章、今上天皇から勲五等瑞宝章を授与される栄誉にも浴した。皇居での瑞宝章授与の際、体が不自由になり椅子に座ったままで拝謁をする私に対して今上陛下から「お体を大切にして下さいね。」と慈愛満ち溢れるお言葉をかけて頂いた。

誠に有り難い時を生きた。あの時、走り去った子供たちが仏のお使いであったのかもしれない。生きながら亡骸の如く過ごしていた自分に生きる意味、目標を教え導いてくれたと此の歳になって気が付いた。もちろん此の体験記を書き記すうちにだが。

元号が昭和から平成に変わり二十七年が経ち、終戦から七十年の節目の年を迎えた。戦後、天皇陛下を国の象徴とし、民主主義、自由主義を旗印とし生まれ変わった日本。想像を絶する経済的繁栄を成し遂げた国家が築き上げられた。にも拘らず前の大戦において亡くなられた方に対する報恩、供養が出来たとは思えなくなった。確かに世界がうらやむ経済的発展を成し遂げた。戦争のあった時代を

経験した私にとって現在の日本は砂上の楼閣に思えるのだ。軍国主義者と呼ばれるかもしれないが精神的支柱と呼ぶべきものが全く存在しない「不思議な国」になってしまったように思えるのだ。何ら自律的思考をすることなく現在の繁栄の果実を貪り食べているように思えて仕方ない。シナ事変から終戦まで約八年間、自国だけでなく他国においてもおぞましい数の生命と財産が失われた。余りにも深い傷であった。そしてＧＨＱによる占領を経験した。糾弾、反省、懺悔が行われた。結果、先の大戦に対する自虐的思考が日本国民のスタンダードスタンスとなった。国を護る為に命を捧げて死んでいった人に対する畏敬の念など持ちえず、戦前の軍国主義国家は悪であり、過去にこういう事があったとして片づけられる。挙句の果てには学校の歴史のマークシート問題に出題され授業の理解度の判断材料とされる。果たしてそれが子々孫々が学ぶ正しい日本の歴史であろうか。

これは死者に対する最も恥ずべき冒涜行為に他ならない。私は看過出来ない。声を出さずにはいられない。

さて、私が特攻に志願し、選抜されたのは十七歳であった。私と同じ年頃の少年が揺るがぬ愛国の信念を以って戦場に赴き亡くなった。靖国の万朶の桜の木の下で国の安寧平和を祈り眠る。私はそれらの人々に尊敬の念を持ち続ける。そんな時代が有った、そんな人がいたでは決して済ます事が出来ない。国を思い家族を思い命を捧げ死んでいった人がいる。その事を、そして、その人が死んで叶えたかった願いを人に語り、共有する、後世に伝え残さんと書き記す。それが生き残った者の最大の務めであり、報恩、供養では有るまいかと。

少年少女に戦争体験を語る。志をもって亡くなった若者の魂を彼らに吹き込む。現在のこの国の繁栄を継承し更なる発展の道を切り拓く次世代の若者の揺るがぬ支柱とならん事を願って。戦争を体験したものでないと判らない事を人に伝える。これが神仏から与えられた天命なのだと。

天寿を全うしたとしても後何年生きられるか判らない。

「生きる目的が国を護るために死ぬ事」であった嘗ての少年が七十年の時を経た今、生有る限り「亡くなった英霊の遺志を人に語り継ぐ事」とさだめ（運命）た。

語り続ける知力、気力、体力の有る限り、そして命の有る限り伝えたい。たとえ望んだ結果をこの目で見届ける事無くとも。只、天命として、天命として…。

十一、そしていま　（二千十六年　八十七歳）

この世に生を受け　選ぶ事無く縁有って産まれて　死も避けえない生涯、　生を受けて親を始め多くの方々との御縁に依り活かされ生きて来た。考えて見ると目に見えぬ糸で結ばれ、切れて、又繋がる。その御縁の中には、肉親でも縁の薄い人、他人で有りながら肉親以上に縁の濃い人もいる。　この世は無常の世界、未来の事は一切知る事は出来ない。あく迄も推測想像の中から創造し、模索しながら前進する。先人達の智慧と生きて刻まれた歴史が現在を作り出した。それを知ることが大切なのだ。

人間は他の動物に無い「考える」と言う智慧が与えられている。だから万物の

長として地球上に君臨し歴史を作り、学び進化出来たのだ。そして、平和で幸せな生活をする為には先祖や亡くなった人達に感謝すると共に其の人達が歩んだ歴史の道標をたずねるが如く学び正しく生きる道を歩むべきである。　先祖あっての今の自分。この考えをしっかり次代に語り引き継ぐ事。これこそが子孫に長く平和な世界の実現と言う正しいＤＮＡを残していくことになるのではなかろうか。

人間の命には限りが有り、長短さまざまである。その命を大切に無駄なく人にも役立つ
使い方をすべきである。人を騙し、押し退け、自分だけ得すればそれで良いとし貯めた金銭財産を死んであの世に持って行った人があったとは聞いた事がない。今自分が所有している物、能力、人とのご縁に感謝する、心の安息を見出す。それが出来ず今の自分にとって不利益、不都合、不足、不満を口に出し撒き散らす。欲しい見栄、名誉ばかり気にする。それでは心貧しく苦しみ多い一生を送ることになりはすまいか。

私利私欲　我利我利人間ではいくら豊かな人間であっても人から尊敬はされまい。　米寿を迎える年まで生かされた。我慾我執も少なくなった。家族を護り養う責任から解放された。天から授かった命も残り少なくなった。若さ故と今なら言えるが戦後しばらくは無駄な生き方をした。若さの体験でもあった。年をとるに従い自分に課された責任に気付き必死で果たそうとした。それには今以上の人格形成が必要と思い様々な人と会い、書物も読んだ。子供も家族を持ち、孫も出来た。そして今、毎日生かされる幸せ、安らぎを感じる。生涯で一等心満たされた日々である。

この十年余りの間、病院で、スーパーでと様々な立ち寄り先で見かけたり、席が隣りとなった見知らぬ五歳以下の幼児、子供に声をかけて来た。親御さんから「この子は人見知りが激しく人になかなか懐かないのに見知らぬ人の相手をちゃんとしてその上バイバイまでした。」と言っていただける事数知れず。「こんない子の笑顔を貰って有難う。お蔭さんでこの子からパワーを貰って元気が出ました。有難う。大切に育てて下さいね。」とお礼を言って別れる。そんな声をかけた子供が別の場所で私を見かけ駆け寄って話しかけて来る。子供の方からすすんで相手してくれるとこちらも余計にうれしくなって、別の場所でまた見知らぬ子供に声をかける。今日まで声をかけた途端泣きだしたのは眠くなり始めた子供唯一人だけだ。

復員して近所の子供に声をかけた途端逃げられた者が此処まで見知らぬ子供に慕われる様になれた。歳のせいばかりではあるまい。不思議なものだ。人は生きて学びながら人間形成が出来て来る。日々大切に疎かにせず生きねばならない。今からでも遅くない。明日が有る限り。過去は還らない。先祖より引き継いだバトンを子孫に手渡し繋ぐ大きな責任が残されている。過去の失敗、成功を現代に生かし未来への大きな飛躍発展へとつなげて行く

過去の過ちからなんら学ぶことをせず、今現在の我慾我執にとらわれて行動していては人間も絶滅危惧種、絶滅種となりかねない。　戦い争う事が人間の本能、真理であると定義づけするのではなく、世界平和への希求、実現が人間本来の姿、原点、運命であると考えるべきである。

平成六年、八年、一六年、一七年の計四回後続車に追突される交通事故にあい体に障害が残った。歩行困難、杖を使っての生活であった。予科練魂で何とか回復しようと試みた。少しずつ杖を使っての生活が少なくなった。
そして平成12年1月、医師から勧められた薬を服用し薬害が発生し白血球が九〇〇迄低下。熱は三九度八分まで上がり高熱が続く。即入院、面会謝絶の処置がとられ、担当医から「兄弟、子供に連絡しなさい。」と人生二度目の「死」との対決となった。但し、目的あっての死では無かった。　地獄県三途川郡賽河原町大字石積字草葉陰四二番地と現住所迄付けたが天命か再び此の世に戻る事となった。まだ遣らねばならない事は無いか。やり残したことは無いか。これからやれる事は無いか。やりたい事は何か自問自答をベッドの中で繰り返し、生かされている事に感謝した。

年を取り病院へと通う回数が増えた。そこで出会う私より遙かに若い方が「一人で色々考えだすと勝手に悪い方へ悪い方へと妄想を始めてしまう。そして自分はこの世の中の不幸をしょい込んだなんて哀れ者なのだろうと思い悲嘆に暮れる。そんな事を夜通し考え眠れなかった。」と言う。夜が明ければいつも通りの朝だ。就寝前と起床後に大きな変化は無い。予科練で鍛え上げられた結果、私が体得した信念「自分にはどんな能力、才能が有るか判らない。それを引き出す努力を怠らない。毎日継続した訓練、学習の結果、自分の望んでいた、又、望外の能力、才能が生まれる。それに気付き大切に磨き上げる。するとそれが特技となる。そこから新たなものが発生、発見される。それに磨きをかける。次の新しい何かを得るために。人の中に入って他人を知る、そして自分を知る。人と切磋琢磨する。助け合う。友情以上の切っても切れない人生の縁が出来る。明るく、健康的だ。考えても答えの出ない事は考えない事だ。まず始める事。諦めず、投げ出さず、コツコツと、喜んでする。明るく振る舞う。その先には今までに無い自分が有るはずだ。「眠れない」なら「眠った何かを引きずり出す」努力をし眠らなければいい。たとえ失敗に終わったとしてもその努力と過程から得た経験には自分で学んだ人に語れる何かが有る筈だ。

二足歩行の人間が生まれ森から出た。外には自分の生命を脅かす外敵がいた。何時死んでもおかしくない、滅んでもおかしくなかった人類。それが生き残って今日の繁栄を築きあげた。科学技術は発達しそれを使って遠く宇宙まで行った人類。この先どこまで人類と文明は発達するのだろう。その発達が滅亡への一本道になりはしまいか。避ける事の出来ない天災ではなく、避ける事が出来る人災、

戦争によって。

歴史は繰り返す。たとえ手痛い教訓を残したとしても繰り返される。

私は命ある限り語り継ぐ、死んだとしてもこの書を以って語る。先の大戦で亡くなった英霊と無辜の市民の遺志を。世界が平和で繁栄する事を。そしてせめてもの供養になればと。

了

平成二十八年二月

巻末付録

附一　福田元少佐とのかたらい

元呉鎮守府参謀少佐　西宮航空隊先任分隊長　福田良夫氏（海軍兵学校六十六期　兵庫県加東市滝野町出身）と共に時が過ぎるのも忘れ語り明かした一夜の互いの思いを纏めた物を書き記す。生き残った我々が、此の大戦に参加した一員として戦没された軍人や民間人の多くの心中を察するに其々違いは有るにしても平和を望まない人はだれ一人も居ない筈だ。家族や先々の事を考えず一直線に護国の為突き進んだのは純粋で若さ溢れる我々だからこそ出来得た行動であった。その短い期間、考え、行動が白虎隊に参加した十六歳の少年と似通った点が有った様に思う。昭和の白虎隊の赤裸々な姿、心情を正しく後世に伝えようとの声を書き上げたのが次の記録である。

予科練に入隊した日の事だ。「そんな安物の気持ちで入隊した者は直ちに帰れ！」と一喝された。もちろん退隊する訳にはいかない。ここで退隊する？親の顔を潰す、自分も大恥をかく。この腰抜けと人々の笑い物になる。その一喝で決して退隊しないと固く決心した。と後になって本音を語る者も居た。

人間の能力の極限に近い猛訓練に耐え抜き特攻隊員として選抜されて潜校に入校した。

人間、腹を括れば如何なる難関も突破し得るものだと痛感した。　同期の者が、心を一つにして命懸けで猛訓練に耐えている。その行動、姿勢、使命感が今にも根を上げそうになる自分にひしひしと伝わってくる。ここで諦めたら同期の者に申し訳ないでは済まない。絶対に同期の者に遅れを取らないと誓った。血反吐を吐くほどの努力をした。そして今日が来た。「人には負けない。」予科練魂を叩き込まれ、自分の物とした。魂に火が起され炎となった。

入隊時は魂の入っていない少年であった。しかし今は死ぬことを恐れぬ仏の魂が入った男となった。「愛国に燃える海軍軍人」言葉で言うのは簡単だ。信念と実力が伴わない、憧れの対象でありたい少年の自分がいた。予科練に入隊したばかりの自分がそうだった。

今、自分の天職が「海軍軍人」と誇りを持って名乗れる人間となった。　何時如何なる命令が下っても、その命令を使命感、責任感を以って実行、完遂出来る。その自信と覚悟が出来た。「笑って死のう。」とじっと目を見詰め手を差し伸べた。其の差し伸べた手を力強く握り締め「靖国の櫻花の梢で咲いて会おう」と答え私の瞳を見詰め返す戦友が居た。今でも電話や手紙で安否を尋ね合う。決して切れる事無い強い絆で結ばれた同期の桜。戦後そんな友とは巡り会えなかった。

明日をも知れぬ命と思い定め、死と真正面から対決していた。死に対する不安、恐怖を全く感じず、自分に与えられた責務を貫徹することで心身共一杯になり、毎日の訓練、勉学に励む事で充足感、達成感が得られた。隊員全員が気迫の塊となり、戦の勝利に向け一丸となって行った。

海軍での階級呼称はある。然れども我々は「特攻隊員」である。崇高な魂を持った戦人だ。地元市民からは「生き仏様」と名付けられた。戦を勝利に導く事を期待され、無言の約束をした仏様、それが潜校生だ。其の期待と約束を果たすため一層の努力をした。我々が搭乗する特攻潜航艇「海龍」は地元市民から「鉄の棺桶」と呼ばれ、「生き仏さんが入る棺桶」と思っておられた。

戦争は惨い。軍人、軍属の命を奪った、無辜の一般市民の命をも奪った。想い出の詰まった財産さえも奪った。広島、長崎に原子爆弾が投下された。ほんの一瞬で地上から何十万もの命が消えた。焦土と化した祖国は残った。国体も残った。象徴として。前の大戦はその終わりにおいて余りにも残酷な世界を生み出した。

特攻隊員は愛する国と日本民族の生命を護り、国家の永遠の繁栄実現の為、我が身命を顧みず敵艦に体当たりし遠く祖国を離れた見知らぬ土地で散華された。

戦は終わった。其の遺志が叶う事無い結末であった。一面の焼け野原が広がる祖国が残った。愛して止まない日本国民も残った。残された者皆が懸命に働いた。知恵を絞って、飽くなき挑戦を繰り返し前進し続けた。数十年が経った。戦後今日まで日本は自国においても他国においても武力を行使する戦争を起こす事、巻き込まれる事も無く平和を謳歌した。民主主義、言論、職業選択の自由、機会均等、教育、医療、年金制度等世界で最高水準の社会を実現し世界に冠たる国となった。そして国連への拠出金、ＯＤＡをはじめとする世界貢献、途上国支援においても秀でた国となった。世界がうらやむ安全に生活できる国として、これまでこの地上に存在しなかった比類ない繁栄を築きあげその恩恵を享受する国家が出現した。まぎれもなく灰塵まみえる焦土と化した土地の跡に。

特攻隊員の遺志は叶ったのだ。

先の戦争において亡くなった方に対し「日本は戦前以上、立派な国に生まれ変わりましたよ」と報告出来ると思う反面、今の日本の状況ではこの平和と繁栄は続かないと危惧するのだ。自分の命と引き換えに日本を愛し祖国、家族を護るため死んでいった人に申し訳が立たないのだ。私は今も、祖国日本、日本民族を心から愛し、誇りを持って生きている。だから憂うのだ。だから伝えたいのだ。

世界で頻発するようになった自爆無差別テロ、日本でも「誰でもいいから殺したかったから人を殺した。」と人の命を何ら尊重する事無く殺傷する行為は断じて許し難い。誰もが生きる権利を持っている。人間としての良識のかけらさえ持ち合わせない。そして、そんな行為を平然と遂行する人間を生み育てた両親から子供の犯した犯罪、死者とその家族に対して一言の詫びすらない。人間の心が有るのだろうか？どんな心を持って生き

て来たのだろうか？私には全く判らない。

私には戦後の繁栄と平和が自分の義務も果たさず権利を主張する『平和ボケ』としか思えない人々を生んでしまった様に思える。こんな平和ボケした人間が繁栄と平和を享受する今の日本。先の大戦で亡くなった人たちは望んでいるだろうか。国を憂う、批判するにしてはお粗末すぎる輩が我が物顔で闊歩する国日本に。

生きる上で義務と責任は果たさねばならぬもの。それが万物の長として君臨する事となった人間の神仏への誓いではないだろうか。その誓いを果たす、果たす努力をした上でその果実たる権利を主張、行使できるのではないだろうか。しかし、今の世の中はどうだろう。義務と責任を誠実に果たす事無く自分の権利、主義主張を声高に叫び要求していないだろうか。自分がこの世に産み落とされた瞬間、「言論の自由」と言う名の権利が神仏から何の契約なく天授、ギフトされた者として。

人は一人では生きていけない。自然の創造物、人類が作り上げた物一切を自分独りの力で作っただろうか。一かけらでも作りえただろうか。衣食住、インフラに至る総て互いに関連性を以って成り立ち今日の命ある生活が存在するのだ。何一つ欠けても支障をきたす。有るのが当然。有って当然。無ければ自分の努力と才覚、人への感謝の念を持ち、それを相手に伝えその人の協力、助けを借りて獲得すればよい。それもせずあたかも自分の欲する無い物が天から勝手に自分の元に降ってくるものと思い込み、そうでなければ騒ぎ出し同じ考えを持った輩と語らい徒党を組んで力づくで自分の占有物としようとする。感謝と反省など存在しない。自分および自分と同じ考えを持った人間だけが良ければよい。人に対する思い遣りの心が無い。自分の利益と不利益が最大の関心事、それを追い求め生きている。損得勘定だけの人生。人に対する感謝、人間の矜持がない。誠に薄っぺらな倖に「一喜一憂」する。先人達が営々脈々と不断の努力をし築き上げた文化、文明をそんな人間にギフトとして与え享受、享楽させてよいものか。

私は危惧するのだ。忌避すべき戦争行為と言う結果を待たずとも日本が内部崩壊してしまわないかと。

私は先の大戦を経験し生き残った。英霊の遺志を引き継ぐものとして日本を平和で幸福な国家、千代に八千代に栄える国にしたい。

国旗「日の丸」や国歌「君が代」は国家の独立、尊厳を表し冒すべからざる象徴である。それに敬意の念と礼節を以ってあたる。当然のことではないか。

「日の丸」「君が代」＝「敬意」「礼節」＝「愛国心」＝「軍国主義国家」=「戦争」と捉える考え方する人々がいる。

私は「国旗」「国歌」＝「独立」「尊厳」＝「協調心」＝「平和主義国家」=「繁栄」だと信じる。

学校教育現場において日の丸を掲げ、君が代を斉唱する事が軍国主義の一歩と主張し、反対する人がいる。そうすることが知識人の素養であり責務とする人々。私はそんな人間を侮蔑する。あの大戦を生き抜いた人間には血の通った哲学としての国旗、国歌なのだ。他国も自国の国旗、国歌に畏敬の念深く尊くも掲げ、歌いあげるではないか。学校において国歌、国旗の成り立ち、歴史を正しく子供たちに教えられているのだろうか。

それが出来ていれば「日の丸」「君が代」に対する子供たちの自立的な思考は当然の結果として生まれるはずだ。決して戦争を想起し、支持するものではないと。

君が代の原歌は、延喜（十世紀初め）の御代に勅撰集として編まれた「古今和歌集」巻七「読人知らず」に見られ、『わがきみは』が『きみがよは』に読み替えられて世に広まり、その後中世近世へといろんな人に親しまれてきた。作曲は宮内省雅楽部　林広守、編曲は海軍省傭教師　エッケルトにより完成し明治十三年十一月三日天長節に初めて演奏され、同二十一年「大日本礼式」に改められ外国にその楽譜が送られ、同二十六年文部省より告示された。

国旗「日の丸」の歴史は古く、中心にある赤い丸は万物に恵みをもたらす太陽を象ったもので皇祖神「天照大神」を仰ぐ日本人が考えだした白地に赤と最もシンプルなデザインで、王朝時代の元日朝賀や即位の儀場に掲げられた「日章」の幡として見られ、やがて源平の合戦以来、扇面に描くようになり建武中興を成し遂げられた後醍醐天皇は日月を金銀として打ち付けた錦の御旗を官軍の旗印として掲げられた。秀吉、家康の代には御朱印船の船印に用いられた。その後幕末に至り、異国船が来航し諸大名も大型船を建造するようになった。薩摩藩主島津斉彬、水戸藩主徳川斉昭の建議で幕府は安政元年（一八五四年）七月、日本船が外国船と紛らわれないよう「日の丸」を「日本の惣船印」と定め布告した。徳川幕府が大政奉還した後、明治三年（一八七〇年）一月二十七日太政官布告に依り白地の中心に赤丸の「日の丸」の幡を「御国旗之事」として正式に用いるようになり一月二十七日を「国旗制定記念日」とした。家庭では門内から見て右側に、二本掲げる際は並立、もしくは交差させる。掲げる時間は日の出から日没までとした。海軍では艦尾に旭日旗（軍艦旗）を掲揚した。

神武天皇即位から二六七五年。今上天皇に至り一二五代を数える万世一系の皇位が連綿と継承された。そんな国は世界に存在しない。日本でも内戦、戦乱の世が有った。その都度幕府が開かれ為政者が変った。他の国家であれば王朝、為政者が変われば地上からその血脈は絶える。しかし、大和の国日本に天皇の血脈、日本人のＤＮＡを宿し続ける誇り高き皇統は残ったのだ。

終戦の年の翌年の歌会始めに詠まれた昭和天皇の御製の歌を紹介したい。

降り積もる　深雪に耐えて　色変えぬ
松ぞ雄々しき　人もかくあれ

国家とは、民族とは、人とは、その解答がこの御歌にはあるのではなかろうか。

源平の合戦の頃とは違い、兵器、戦闘、戦術は様変わりした。刀槍、弓矢が鉄砲、大砲、ミサイルへ、馬が戦車、飛行機、軍艦、潜水艦へと。戦地へ赴くことなく自国の基地でボタンを押せば化学兵器、核兵器を搭載したミサイルがピンポイントで交戦相手国の目標物

目がけ飛んで行き命中、爆発する。その状況をパソコンの画面上で見る事さえできる。汗一つかかず、傷一つ負わず、硝煙の臭い血の臭いをかぐことなく、阿鼻叫喚の声も聞くことなく戦は行われる様になった。テレビゲームの操作にも似た戦である。そんな戦であっても兵士は斃れ、無差別に民間人も殺戮される。それも一度に大量に、愛して止まない住み慣れた土地の風景を一変させ、焦土と変えて。家財産を失い、家族、職も失う。食べ物さえない。生きる術を無くし難民と化した人々。それが「戦争経験者」である。彼らは安全な場所を求め必死で逃げまどい汗みどろ、全身至る所に傷を負う、沁みついた硝煙、血の臭いは去らない。阿鼻叫喚の叫びは戦が終わった平和な世になっても地獄の声となって安息の夜を恐怖の暗闇に変えてしまう。

焼け跡に戻り、自分の家族を必死になって探す。たとえ生きての再会が叶わずとも、亡骸を、着ていた物、家族の絆である想い出の品々を探す。自分が空腹である事も忘れ灰塵にまみれ必死になって探す。たとえ徒労に終わろうとも。見つからなかった不運をその人の分まで此世を生きようと言う意志に変える。運よく生きて再会できた喜びは明日への生きる力となる。救援物資、炊き出し、電気も水道も無い。焼け残った材木、トタンを集めバラック小屋を建てた。僅かな水を口にし空腹を押さえた、食料が手に入ると分けあった。「無我夢中で生き残る。生きている。生きる。」そこから立ちあがっての今日である。

戦争は天災ではない。人災である。天災は予防が出来ない。突然やってくる事さえある。人災は人間の英知を結集し、皆が力を合わせ避ける、起こさぬ努力をすれば予防、回避、発生させない事が出来る。人間は人災である戦争を起こさない事が出来る筈だ。競い争う事が人間の本能であるにしても、防衛本能も備わっている人間にはそれが可能なはずだ。

終戦から数えて七十年の記念すべき節目の年を迎えた。亡くなられた戦没者、沖縄を始め、広島、長崎への原爆投下、無差別空襲で亡くなられた民間人の冥福、英霊に誠の祈りを捧げる。

此の様な事を福田氏と語り明かした。そして、自分の命を国を護る事の引き換えに敵艦に体当たり散華された特攻隊員、戦地、外地、内地で亡くなられた兵士、民間人の方々に敬虔の誠を捧げ御冥福をお祈りした。

附二　戦争体験記を読んで（福田元少佐の書簡）

私が指導した予科練の中にこんな優秀な人物がいたのかと唯々おどろきの一言あるのみ…

一.赤穂中学の教育とハワイ空襲開戦が君を予科練志願へと引きつけた動機は時代的なものでうなずくことができるが…

予科練生活僅か一年余で十七歳の若者が海龍乗組員へとつき進む姿は、今の青少年には理解できないでしょうネ。そこに原点があるように思われます。

日本人の血。当時の日本人の血と同じ血でも血の色が違っているようです。血の色は社会環境、教育、国際情勢によって変化するのでしょう。よい色の血液をつくるのは何と言っても家庭教育、学校教育、社会教育が原点でしょうネ。

一.平成十二年入院して生死の境をさまよわれたこと。初耳でおどろきましたが、この苦境を乗りこえて今の上山人生観が生まれたのでしょうネ。

一.終戦が後半年おくれていたら予科練十四期生の大半は…あ、よかった。

一.非理法権天

旧制中学の剣道部で教わりました。今も脳裏にきざみこまれています。

（人生訓として）

余生　如何に生きるべきか。私の毎日の課題です。なにかとお世話になりますがよろしくネ

十月十八日

上山　様

海軍兵学校六十六期生

呉鎮守府参謀　福田良夫

追伸

一.三泊四日の休暇の記事を読んで感涙いたしました。

二.青少年の教育問題については同感です。

三.海龍の江田島（兵学校）に陳列されておりますが詳細については貴兄の記事ではじめて知りました感無量です。

四.余生の生き方について貴兄の考え方には敬服いたしますが小生そこまで達していないようで恥ずかしい限りです。

以上思いつきですが…

附三　兵員総数および戦死者数

昭和一二年七月　七日　支那事変勃発
昭和二〇年八月一五日　大東亜戦争終戦
戦争期間　二、八六七日　約八年

支那事変より大東亜戦争終戦までの兵員総数（台湾、朝鮮出身軍人軍属含む）
陸軍　五、四七二、四〇〇人
海軍　二、四七六、七〇〇人
合計　七、九四九、一〇〇人

戦死者数
陸軍　一、六四七、二〇〇柱　内、餓死者　一、一五〇、〇〇〇柱
（戦死者の約７〇％）
海軍　四七八、八〇〇柱　内、艦と共に戦死　一九〇、〇〇〇柱
（戦死者の約４〇％）

合計戦死者　二、一二一、〇〇〇柱
内、陸軍海軍特攻による戦死者　９、５００柱

厚生省援護局三月一日調査